**№15　テーマ『人格の高さをつくる』**

**講話日2003年2月24日**

**司会：それでは、芳村先生、よろしくお願いします。**

**芳村：はい。皆さん、こんにちは。今日も本当にお忙しい中を、話を聞きに来ていただきまして、ありがとうございます。今日のテーマは、人格の高さをつくるという、そういうテーマなんですけども、もうこれは前回、去年の最後にですね、人間的魅力の形成という話をしまして、その中で、人格というものには、高さ、深さ、大きさがあるという、そういう話をさせてもらいました。これからこの人類はですね、物質的には、ある程度、豊かになったんだけども、人間性そのものがですね、何百年間か、まったく進化していないと。全然、その人間性における成長というものの新たなる原理というものをですね、ここ何百年間か、誰も発見できなかった。そういうことでですね、物質的には豊かになったんだけど、人間性そのものは成長してない。成長してないどころじゃなくって、その目標をなくした人間性は堕落するんですね。ですから、全世界、人類の品格というものがですね、今日、非常にこの堕落傾向にあるという、そういうふうな、この批判がですね、出てきております。**

**それと同時に、時代そのものが、量の時代から質の時代へと大きく転換してますから、だから、会社でも、これからの会社は、大きな会社をつくるということがですね、目標ではなくって、本社、その１つだけでもいいと。どれだけの質の高いですね、高度な質を持った会社をつくれるか。それが、これからのですね、企業、カンパニーというものの成長の目的でなければならない。そういうふうにこう、考えることができるような時代であります。決して大きいことがいいことではない。その質の高さを追求していくことがですね、成長の目標という、そういうこの時代になってきました。やっぱり、この質の高い内容を持った会社をつくろうと思ったら、やっぱり、カンパニー、企業は人ですからね。だから、その人の成長という、人間そのものが質的に成長していかないと、会社の社格は上がりませんし、また、仕事のレベルも上がってきませんし、いろんな面でですね、この人間の質というものは、さまざまな行動に表現されるわけであります。その意味においても、これからのですね、企業は、もっぱらこの人間性の成長というところに、この中心を置いた教育をしなきゃならんというような、そういう時代になってきました。**

**その人間の人間性における成長というもののですね、その核になる問題が、これから３回シリーズでお話をしていく、人格の高さをつくる、人格の深さをつくる、人格の大きさをつくるという、内容になるわけですね。今日は、その人格の高さ、深さ、大きさという、人間性を成長させるためには、高さ、深さ、大きさという３つの方向性を持ったですね、成長というものを自ら自覚し、また、それを意図して、自分自身を成長させるという目標を持たなければならない。その中の今日は、人格の高さをつくるという、その話に焦点を絞ってお話をしたいと思います。**

**これはですね、それぞれ３回に分けてお話をするわけですけども、だけども、具体的には、人格の高さというものも、この深さ、大きさに関係してますし、また、深さというものも、高さ、大きさに関係しておる。また、大きさというものも、高さ、深さというものを、この基礎にしながらですね、成り立つものであって、人間そのものが有機体ですから、だから、便宜的にはこうやって分けて話をすることもできますけども、現実のこの自分自身の人格、人間性というのは、この高さ、深さ、大きさというものが、３つ有機的に結び合ってですね、自分の人間性、自分の人格というものを表現することになりますので、実際には、こうやって切り離して話すことは、抽象的なことになるわけですけども、だけども、やはりこの人格を成長させていこうと思ったならばですね、その構造を明らかにして、そして、それぞれの要因というものを一つ一つ、この考えていくという手順を踏まないと、その３つのですね、この人格を成長させるための方法論というものを組み合わせて、そこから相乗効果が出てくるという、そういうこの命の姿というものをつくり出すことはできません。**

**ですから、便宜的ではありますけども、一応、それぞれ３つに分けて話をいたしますけども、皆さん方においては、この３つのことが有機的に絡み合って、自分の人間性をつくっておるという、そういうふうにですね、考えておいてもらいたいと思います。まず人格には高さがあると。この人格の高いということは、いったいなんなのかということですね。これは、私がお話をしておる感性論哲学というのは、理性で、理屈で、その物事を考えていく、そういう哲学ではなくてですね、感性の実感とか、自分の本音というものを原理にしながらですね、本音と実感というものに根拠を与えていく。そういうこの考え方をする哲学であります。だから、実感、本音というものが、その土台原理であって、その本音と実感というものを原理にしながら、理性の考え方を修正していく。そういうふうなですね、この仕方で、考えていくのが、感性論哲学であります。**

**ですから、聞いていただく皆さん方においてもですね、この自分の本音と実感、すなわち、具体的にいうならば、自分のこれまでの人生体験というものを通して、あるいは、仕事の体験というものを通して、あの講師の言ってることは納得できるかどうか。あいつは本物か、偽物か。そういうふうな意識でですね、聞いてもらいたいと思います。理屈で聞くとですね、このなんとなくこう、いや、そうじゃないんじゃないかという、反論したくなるようなこともあるかもしれませんけども、体験を通して、自分の本音と実感というものにですね、この腑に落ちるかどうかという、そういうこの聞き方をしていただくと、感性論哲学は価値が出てくる。そういうこの哲学でありますので、そういう聞き方をしてもらいたい。**

**ですから、人格の高さとはなんなのかっちゅうことを考える場合でもですね、自分自身がいったいどういう人に人格の高さを感じるのかという、この自分の実感と本音というものを思い出してもらいたいんですね。自分はどういう人に人格の高さを感じるだろうか。今それをこう、皆さん方に考えていただいて、お一人お一人の考えをこう、聞いておったんでは、時間がなくなりますから、結論を申しますけどですね、われわれは、自分よりも知識や技術や教養レベルの低い人間に人格の高さを感じることはない。だから、大人が子どもに対してですね、君はなかなか人格が高いねとは言いづらいんですね。いや、子どもには、一般的に見て、人格の高い子どもはいない。子どもでもですね、なかなか深いことを言う子もいるし、子どもでも、なかなか心の広い子がおるんですけど、子どもには、人格の高い子はいません。また、先進国のですね、高い教育を受けた人間が、後進国の教育をあまり受けてない人々に、この人格の高さを感じることはないのであります。**

**そういうことをですね、この考えてみるならばですね、人格の高さというものは、どうもその人が持っておる、知識や技術や教養の量というものに関係してるんじゃないかというね、そういうこの発想が生まれてくるわけであります。人格の高さというものは、その人が持っておる、知識や技術や教養の量に関係しておると。自分よりも知識レベルの低い人間に対して、人格の高さは感じない。だけども、たくさん知識を持っておるから、人格が高いかといったら、そういうわけではない。たくさん知識を持っておるから、人格が高いということには限らない。だけども、人格が高いといわれるためには、必要条件として、その他人よりもですね、ほかの人よりも、よりたくさんの知識と技術と教養というものを持っておるということがですね、人格の高さというものが、表現される必要条件である。だけど、それだけでは十分ではない。だから、高度な教育を受けてですね、高度な知識を持っておるから、人格が高いかといったら、そういうわけではない。もう東大に入るようなですね、そういうこの非常に知識の量の多い、この人間でも、けっこう軽薄なですね、薄っぺらな人間はたくさんおります。だから、決して知識がたくさんあるから、人格が高いとは言われない。だけども、人格が高いという評価がされるためにはですね、知識と技術と教養の量というものを追求していくことが必要な条件である。それなしには、人格の高さは生まれない。そのことをですね、まず、われわれは知る必要があります。**

**この人格の高さとか、深さというのは、木で言ったならばですね、木の、植物の木に例えたならば、人格の高さは、これは地面の上に出ておる幹の部分であってですね、人格の深さというのは、木で言えば、この地面の下にある根っこの部分だというふうに言うことができます。ですから、その意味でもですね、人格の高さというのは、ある意味で、量的にこの量ることができる、量的に見ることができる、ビジュアルな領域であって、人格の深さというのは、これは直接的には目に見えない、アンビジュアルなですね、その質的なこの世界だというふうに、言うことができるわけですね。ですから、人格の高さというのは、量的な、ビジュアルな、そういうこのものとして、われわれは、この判断することができるということからしてもですね、その人格の高いということには、知識の量というものは、非常に大きな影響を持っておって、人格の高さの大きな部分を知識の量が占めておるということをですね、まずは、この理解してもらいたいと思うんですね。だけども、知識がたくさんあるから、人格が高いとは限らない。**

**そういうことを考えるとですね、まず、その人格の高さとはなんなのかということを端的に申しますと、人格の高さというのは、その人が生まれてから今日までに獲得してきた、獲得してきた知識と技術と教養の量に関係するというですね、そういうこの、まずは定義をしなければならない。人格の高さというものは、その人が生まれてから、今日までに獲得してきた知識と技術と教養の量に関係する。これは、やっぱり、人間がですね、人間の格というものを獲得していくためにはですね、この抽象的な、この人間が生産する知識というものがですね、どれほどの量を持っておるかということがですね、人間というものを特徴付ける重要な要素であります。人間は知識をつくる動物なんですね。この人間以外の動物は、体験、経験というふうな、そういうふうなですね、その記憶を知識として持っておるだけですけども、人間というのは、体験、経験の記憶としての知識じゃなくってですね、抽象概念という、自らがクリエイトした、自らがつくり出したですね、その観念とか、概念とかという、そういうふうなものとしてのですね、知識というものを持っとるのが、人間の特徴であります。**

**これは、わかりやすく言うならば、犬や猫はですね、その犬や猫でもたくさんの知識を持っておりますけど、だけど、犬や猫が持っておる知識というのは、その現実の目に見えるこの松の木、梅の木、桜の木というような、そんなもんなんですけど、人間の持ってるこの知識というのは、そういう個々のですね、一本一本の具体的な木というものに対する知識じゃなくって、いわゆる木という、そういうこの知識を持ってるんですね。木だとか、机だとか、家だとか。家といっても、いろいろあるんですけど、家という概念というのは、これは現実には存在しないんだけど、それを使うことによって、いろいろ考えていくというのが、人間の特徴なんですね。それが、言葉を持つ、この存在である人間の特徴であって、言葉というのが、また知識というものと同次元のものですからね、人間は言葉をつくる動物であり、言葉を遣う動物であり、また、知識を生産する動物である。また文化をつくる動物である。そういうふうにこう、言われる。そこに、人間というものが、人間になっていく道筋がある。人間が人間になっていくためには、抽象概念、あるいは、観念とか、知識とか、言葉というものをですね、たくさん覚えていかないと、人間は人間にはなれません。**

**そんな意味でですね、人間の格というものを示す重要な要素が知識であります。その意味でも、人格の高さというのはですね、その人間を人間たらしめる重要な要素である知識に関係してるという、そのことをですね、われわれは忘れてはならない。だけども、その知識をたくさん持っとるから、人格が高いのではない。それが、その先ほど申し上げたですね、その人が生まれてから、今日までに獲得してきた知識や技術や教養の量に関係する。それが高さである。人格の高さは、その人が生まれてから、今日までに獲得してきた知識や技術や教養の量に関係する。この関係するということが、非常にこの、表現としては意味深な表現なのでですね、関係するということはなんなのかといったら、たくさん知識を持っておるから、人格が高いとは限らない。だけども、人格が高いという、この評価を得るためにはですね、人よりもたくさんの知識や技術や教養の量が、その人間の中に存在していなければならない。**

**じゃあ、必要条件はそうなんだけど、人格の高さを最終的に決定するですね、十分条件とはなんなのか。そのことを、考えていかなければなりません。これは、学問的に申し上げるならばですね、十分条件というものが、どういうふうにして導き出されるのか、出てくるのかといったら、十分条件というものは、必要条件が成り立つ根拠を追求していくと、そこから十分条件が出てくるという、それが、学問的な方法論であります。そこで、この人格の高さというものを形成する、つくるためのですね、十分条件、人格の高さを決定する最終的な要因条件というものをですね、われわれが見いだしていこうと思ったならば、必要条件が成り立つ根拠を追求していくという作業をしなければならない。作業といっても、べつにそんなに難しいことはないんですけども、作業というのは、どういうことなのかといったら、人格の高さというものは、知識の量に関係しとるとするならば、その知識の量はどうしたら増えるんだということを考えていく。知識の量が増える、その理由、根拠をですね、考えていく。そうすると、そこから十分条件が出てくるという、そういうふうに考えるのが、学問的方法論なんですね。**

**じゃあ、具体的にわれわれは、どういうふうにして知識の量を獲得するのか。どういうふうにして技術の量を獲得するのか。どういうふうにして教養を増やすということをやっておるのかといったら、具体的には、学校に行ってるわけですね。幼稚園から、小学校、中学校、高等学校というふうに、学年が進むにしたがって、だんだん、だんだん、知識や技術や教養の量が増えていくというのが、現実、人間社会におけるですね、その知識の量の増え方であります。じゃあ、いったい学校教育とはなんなのか。学校教育の究極の目的は、知識を与えることではないんですね。学校教育の究極の目的は、人間をつくることであります。人間らしい人間をつくるということが、学校教育が持っておる究極の理想であり、究極の目的である。そのために学校教育は子どもたちに、その知識や技術や教養を与えるという作業をするわけですね。ということは、子どもたちに、知識や技術や教養を与えるということを通してですね、人間をつくるという目的を実現しようとするのが、学校教育だというふうにこう、言うことができる。そして、学校というのは、学年が進むにしたがって、学年が進むにしたがって、だんだんと知識が増え、技術が増え、教養が増えていくという、そういうこの成長の仕方をさせるところだ。**

**じゃあ、その知識や技術や教養を与えることが目的ではなくて、それを手段にして人間をつくるとはどういうことなのか。人間をつくるとは、いったい何をつくることなのか。何ができたならば、人間はできたと言えるのか。そのことをですね、考えていかなければならない。そこで、どういうことがわかってくるかといったらですね、学校というものが、学年が進むにしたがって、より高度で、より厳密な知識や技術や教養を学生に、生徒に与えていくという、この作業をするのは何故になのか。それは、少しずつ、より高度な知識を人間に与えていくことによってですね、その人間の心の中に、どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでもより厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真実なるものを追求したい。どこまでもより善なるものを求めていきたい。どこまでもより美しものを、俺は求めていきたいんだという、そういう価値への情熱、価値への欲求というものをですね、その人間の命に呼び覚ます。それが実は、順序を踏んで、少しずつ、より高度で厳密な知識や技術や教養を与えていくということを、学校教育がすることのですね、究極の目標であります。**

**学校教育が単に人間に知識や技術や教養を与えて、それで事足りるとすれば、それは知識教育であって、それは知識教育であって、人間教育ではない。知識や技術や教養を与えるということを通して、人間をつくるとは何をつくることなのか。それは、人間の心の中に、どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでもより厳密なものを求めていきたい。どこまでもより真実なるものを追求したい。どこまでもより善なるもの、より美しいものを俺は求めていきたいんだという、激しい価値への情熱を、価値への欲求をその人間の心の中に呼び覚ますことができなければ、その教育は人間教育としては失敗の教育であります。なぜ人間をつくるということが、価値への情熱をつくることなのか。なぜ人間をつくるということが、価値への欲求を呼び覚ますことなのか。**

**これは去年ですね、話させていただいた本物の人間とはなんなのかという話を思い出してもらいたい。人間というものは、価値の世界に住む存在である。価値の世界は、人間にのみ固有の存在領域だ。このことを、去年ね、この本物の人間とはなんなのかというところで話をさせてもらいました。人間は価値の世界に住む存在である。価値の世界こそ、この人間固有の存在領域である。人間は価値の世界に住んでおるんだ。神様や仏様は、神や仏は、完全かつ絶対という存在領域に住んでおる。また動物は、不完全かつ有限という存在領域に住んでおる。だけど、人間は不完全でありながらも、完全なるものを求めて生きようとする。そこに人間の価値がある。そして、不完全でありながらも、完全なものを目指して生きようとする、その努力によって生まれてくる世界。それが価値の世界である。**

**価値の世界は、人間のみ固有の存在領域である。そして、人間の本質である心とはなんなのか。人間の本質である心とは、心とは、意味と価値を感じる感性だ。人間、意味を感じなければ、やる気にならない。価値や素晴らしさを感じなかったら、命は燃えないんだ。それが人間だ。だから、人間をつくるということは、何をつくることなのかといったならば、人間をつくるということは、価値への情熱を、価値への欲求を命に呼び覚ますことだ。それができなければ、人間教育は失敗であったと言わなければならない。単なる知識や技術や教養を与えただけで、教育ができたと思ったら、とんでも８分、歩いて10分。それは単なる知識教育であってですね、人間教育ではない。人間をつくる教育、人間を育てる教育をしようと思ったならば、その人間の心の中に価値への情熱を、価値への欲求を呼び覚まさなければならない。そして、仕事の上においても、人生の上においても、ものづくりにおいても、人間にとって一番何が大事なのか。それは知識ではない。人間にとって一番大事なのは、俺はどこまでもより高度なものを求めていきたいんだ。俺はどこまでも厳密なものを追求したいんだ。俺は真実を追究したいんだ。俺は真なるものを求めていきたいんだ。自分はよりよいもの、より美しいものを求めていきたいんだという、この情熱がですね、その人間の人格を高めるだけじゃなくって、その人間の仕事の質を向上させる。その人がつくる製品の質を向上させる。そして、社格を上げ、また家の格を上げていくというですね、そういうこの根本原理になるわけであります。**

**人間をつくるとは、価値への情熱を呼び覚ますことだ。そういうふうに考えていったらですね、人格の高さというものをつくる究極の原理はなんなのか。それは、価値への情熱である。価値への欲求であるというふうに言わなければならない。なぜ、その価値への情熱というものがですね、人間の格の中の高さという、この人格の高さ、人間性の高度さというですね、人間性の高度さというものをこの質においてつくっていくための原理なのか。それは、この価値への情熱さえあったならば、どこまでもより高度なものを俺は求めていきたいという情熱さえあったならば、放っておいたって、その人間は成長していってしまうんだ。放っておいたって、その人間には、よりたくさんの知識と技術と教養が増えざるを得ない。要するに、無理に与えようとせんでもですね、その人間が価値への情熱さえ持ったならば、自ら主体的に、自ら好んで、自ら求めて、たくさんの知識や技術や教養を求めていく行動をするはずである。**

**欲求のない人間に何ができるんだ。欲求があってこそ、命から湧いてくるものがあってこその人生だ。何がしたいといって、べつに、べつに何もしたいことは湧いてきません。もう死んだようなもんだ。命から湧いてくるものがあってこその人生。命から湧いてくるものがなくなってしまったら、もうロボットだ。言われるままに動く。命令されなければ動かん。人間じゃないと。人間ならば、自ら考えて、自らの情熱に基づいて、自らの欲求に基づいて動かなければならない。その人間らしい欲求とはなんなのか。人間を象徴する、人間らしさを決定する欲求とはなんなのか。それこそ、価値への情熱だ。なぜならば、人間は価値の世界に住む存在であり、人間の本質である心とは、意味と価値を感じる感性だ。命から価値への情熱が湧いてこなかったならば、人間にはなれない。人間の顔はしておっても、その人間は人間ではない。まだ動物である。そういうふうに言って過言ではない。それほどですね、この価値への情熱というのは、人間にとって欠くことのできない重要な人間の条件であります。**

**どこまでもより高度なもの、どこまでもより厳密なもの、どこまでもより真実なるものを追求したい。この情熱があったならば、どんなに素晴らしい仕事ができるか。そして、真、善、美を求める。この真、善、美を、真なるもの、善なるもの、より美しいものを求める。真、善、美を求める心こそ、まさにこの人間の品格というものをね、成長させる、人間の品格をつくる基本原理であります。だから、われわれがですね、これからは人間として、自分の質の高さ、人間性における質の高さを追求して、自分が今の時代の時流にのっとってですね、その自分を質において成長させようと思ったならば、その意味において、われわれが人格の高さを求めようと思うならば、われわれはどういうこの自覚を持たなきゃならんか。われわれが人格の高さを追求しようと思ったならば、われわれは、果たして本当に俺の中に、この価値への情熱が燃え盛っておるか。本当に俺はどこまでもより高度なものを求めていきたいという欲求を持っておるのか。そのことを自分に問わなければならない。**

**それがなかったならば、残念ながら原理からいえば人間ではない。どこまでもより高度なものを求めていきたい。どこまでも厳密なものを求めていきたいという思いを持って生きていなければ、人間ではない。人間の格がないんだ。まだ残念ながら、人間の顔はしておっても、人間ではなく、人類という、動物学上の分類における人類という次元である。まだその格が備わっていない。人間としての格が備わっていない。人間の格を決定するものは価値への情熱だ。本当にわれわれが、人格の高さというものを追求したいと思うならば、人格の高い人間になりたいと思ったならば、本当にわれわれが、高貴なる精神、高く貴いね、高貴なる精神というのを持って、人生を生きるという、この人間として高度なですね、人生というものを歩みたいと願うならば、われわれは、自分の命の中に、この価値への情熱が燃え盛っておるか。価値への欲求が命から湧いてきてるかということをですね、自らに問い、また、その欲求というものを湧き出させるための努力というものをですね、われわれはしなければならない。**

**まず、この人格の高さにおいてですね、自覚しておいてもらいたいのは、どこまでもより高度なものを求めていきたいという意識を持って仕事をしてなければ、俺は人間じゃないんだということですね。どこまでも、より厳密なものを追求したい。この程度のことでは、俺は自分を許せないというね、そういう気持ちを持っていなかったら、人間として生きてるとは言えないということを、まずは自覚してもらいたい。どこまでも、より真なるものを追求したいという思いがなかったならば、人間ではないんだ。どこまでも、より善なるものを追求したいという意欲がなかったならば、その気持ちが命から湧いてきてなければ、人間の格がないんだ。どこまでもより美しいものを追求したい。その気持ちがなかったらもう人間ではないんだ。それが、この人格の高さというですね、高貴なる精神。人間の格、人間の領域というものを表現するものであり、また、そういうこの価値への欲求をつくり出すことが、人間をつくるということのですね、究極の原理だと。**

**これからの人類は、そういうこの情熱を持ってですね、人生を生きるという自覚を持たなければなりません。それが人間であることを悟るということですね。これまでは、仏教の悟りとかですね、宗教的な悟りとか、いろいろ悟りが言われましたけど、それは過去のものだ。これからの人類が、人間としての歴史をつくっていく、より高度なですね、人間としてより高度な、新しい、より高次元の生き方をしたいと思ったならば、われわれ、まずこの価値への情熱というものをですね、自分の心に呼び覚ますということを、まず目的にしなければならない。社員教育においても、何においても、まずこれが大事だ。全社員の中に価値への情熱が燃え盛れば、会社はたちまちにして、ものすごい魅力的なね、素晴らしい会社にならざるを得ない。仕事においても、技術においても、人間の立ち居振る舞いにおいても、そこには素晴らしさが、感動があふれ出てくる。**

**そのどこまでもより高度なものを追求したい。どこまでもより厳密なものを追求したい。どこまでもより真実なるもの、よりよいもの、より美しいものを追求したいという人間の行動、生き様は、まさに感動ですよ。それが人間の真実だからね。真実に触れれば、人間は感動します。そして、その価値への情熱がなかったら、自分には、自分には、人間の格はないんだということをですね、意識してもらいたい。だから、そんなしょっちゅう、朝から晩まで、そんなこう価値への情熱、価値への情熱と言っておったら、あまりにも窮屈でというか、あまりにもね、荷が重過ぎて、本当にこう、神経衰弱になってしまうかもしれませんからね、そんなことは別にしておいてね、人間が不完全ですからね。遊ぶときもなければならない。だらっとするときもなければならない。だけど、本当はどうでなきゃならんのかというね、その自分のあり方の本当の姿というものをですね、見失ってはならない。自分を見失ってはならない。人間には本物と偽物があるんだ。人間という、この命のかたちを持ってる限りは、本物を目指さなければならない。**

**われわれの、この肉体には、この肉体をつくり出した母なる宇宙の思いが込められておる。自分の肉体、自分のこの人間という肉体の中に込められた、母なる命、母なる宇宙の願いとはなんなのかと。思いとはなんなのか。祈りとはなんなのか。それは、われわれがどこまでもより高度なもの、どこまでもより厳密なもの、どこまでもより真実なるもの、どこまでもより善なるもの、どこまでもより美しいものを追求していきたいという価値への情熱を燃え盛らせて生きてくれることが、人間という命をつくった母なる宇宙の願いであり、祈りであり、心である。そのことを母なる宇宙は願ってるんだ。その思いを持って、この人間に、この形を持った、この肉体というものを与えたのであります。この肉体の中に、このわれわれが持ってる肉体の形の中に、この価値への情熱を持って生きるという、この原理がですね、表現されておるわけです。その価値への情熱を持って人類はこれまで生きてきたが故に、この形になり得たんですよ。人類の歴史を振り返ればですね、時代がたつごとに、より高度なものが生まれてきた。より厳密なものが生まれてきた。より真実なるものが生まれてきた。よりよいものが生まれてきた。より美しいものが生まれてきた。それがこの人類史を振り返ってわかるですね、人類の進歩というものの、この軌跡というか、これまで歩いてきたですね、道筋なんですよね。**

**まさに人類は、一人の人間、一人ひとりの人間はそう思ってなくても、人類として、確実に人類は、母なる宇宙の思いを実現する歴史をつくってきたのであります。だけども、人間が本当にその人間として目覚めたですね、自覚した生き方をするならば、自然とそうなってしまうという、そういう状態で、無自覚的に自分を放置してはならない。その歴史を振り返ることによって、人間の格のある生き方とはなんなのかということを自分が会得してですね、そして、自らの人生において、この価値追求の人生、この価値への情熱に原理を置いたですね、生き方というものを自分に課さなければならない。それが素晴らしい人生のこの基本だ。本当に自分が幸せになり、本当に自分が成功をつかみ、本当に自分がこの命を燃やすような人生というものをですね、生きたいと願うならば、自分が本当に自分として最高の人生を生きたいと思うならば、その基本にこの価値への情熱がなければならない。価値への情熱なくして、素晴らしい人生なんてあり得ない。成功なんてあり得ない。幸せなんてあり得ないんだ。幸せを実現するための基本原理、もっと幸せになりたいとはいったいなんなのか。もっと幸せになるための方法論が、より高度なものを追求することなんだ。より厳密なものを追求することなんだ。幸せになるために、われわれは真実を追究しなきゃならないんだ。求めなければならないんだ。より美しいものを求めていかなければ、幸せにならないんだ。**

**幸せを実現するとは、幸せを手に入れるとは、まさに価値への情熱を自らの生き方において示すことであります。そして、このどこまでもより高度なもの、より美しいものを求めていきたいという、この価値への情熱こそ、まさに人間において高貴なる精神、高く貴い、高貴なる精神と言わなければならない。高貴なる精神とはなんなのか。人格の素晴らしさ、人格の高さを象徴する、この高貴な精神とは、まさに価値への情熱、どこまでもより高度なもの、厳密なもの。真、善、美を求めて、求めて、求めてやまない、その心こそ、まさに人間の品格を示すものであり、高貴なる精神そのものであります。そういう価値への情熱に根差して生きることの素晴らしさというものをね、ぜひ皆さん方も、お一人お一人が体験してもらいたい。身を焼き尽くすような、この燃えるような人生というものをぜひ体験してもらいたい。より高度で、より厳密なものを追求することが、どんなに血湧き肉躍るね、感動的なことなのかということをですね、ぜひ感じてもらいたい。**

**まさに今、NHKのドラマでや、ドラマじゃなくて、ドキュメントでね、やってる、あの『プロジェクトX』、不可能を可能にした男たちのドラマ、あれこそまさに、価値への情熱にこの身を焼き尽くしたね、男たちの美学なんだ。だけど、あの『プロジェクトX』に出てくる男たちだけが、不可能を可能にする生き方をしたんじゃない。われわれは、みんな誰でもですね、おぎゃあと生まれたら、みんな例外なく、不可能を可能にし続ける生き方をさせられてるっちゅうか、してしまってるんですよね。いわゆる這えば立て、立てば歩めの親心というのは、まさに昨日まで這ってたんだけどね、今日は立つように。自分もそういうことをね、したいと思って、子どもは這って、這って、這って、ついには何かにつかまって立ち上がって、立ったら、今度は歩いてという、そういう欲求を皆、持ってる。それが命というものの本当の姿だ。命はまさに価値への情熱によってですね、生きておるわけであります。**

**その価値への情熱をですね、単に無自覚的な、そういうこの行動にね、とどめておくんじゃなくって、それを自覚化し、それを意識化し、それを自分のこの人生の生き方としてですね、自分のものとして表現していく。そこに人間の格というものが生まれてくるわけですよね。人間は本能を超えるところに人間がある。人間は遺伝子に支配されてはならない。遺伝子の支配を超えて、本能の支配を超えて、そして文化をつくるのが人間だ。遺伝子に支配され、本能に支配されておるのは動物だ。人間も動物だけども、だけど、人間は単なる動物ではない。動物のように本能に支配され、遺伝子に支配されて生きてるんじゃない。人間は明らかに遺伝子の支配を超えた。人間は明らかに本能の支配を超えた。そして、文化をつくった。動物の生き方というのはですね、与えられた現実にどう対応するかという、そういう保守的な生き方なんですね。だけど、人間というのは、与えられた現実をどう変えていくかというところに、人間らしい生き方の基本がある。与えられた現実をよりよいものに変えていかなければ、人間ではない。与えられた現実に適応し、その新しい現実の支配のもとでですね、しか生きられないというのは、これは動物だ。われわれは、与えられた現実を自分の意に沿うように、自分が望むように、与えられた現実を変えていこうとする生き方、そこに人間らしさというのが生まれてくるわけですね。**

**例えば、人間にとって、人生においても、仕事においても、いかにこの価値への情熱が大事なのか。そして、人間をつくるとは、人間の心の中に、命の中に、価値への情熱を呼び覚ますことだ。価値への欲求をよみがえらせること、それが人間をつくるということの究極の原理だということをですね、忘れてはならない。社員教育が単なる知識教育や技術教育や教養教育に終わってはならない。教育は人間を質において向上させなければ、今日の意味での教育ではない。人間の人間性における質の成長というのは、まさに価値への情熱そのものにですね、根差しておるんだ。価値への情熱さえ持ったならば、知識なんか与えなくっても、自分で獲得していってしまう。価値への情熱さえ持ったならば、ひとりでに他人よりも、より多くの知識や技術や教養を持ってしまわざるを得ない。だから、結果として、人格の高い人間を見たらですね、結果として、自分よりも相手のほうが、よりたくさんの知識や技術や教養を持ってしまっておるんだ。そして、結果として、われわれは、その人物に、なんて人格が高いんだろうと、人格の高さを感じるわけだ。高貴なる精神を感じるわけだ。高尚なる趣味とかですね、孤高の鉄人とか、あるいは、高貴なる精神とか、高邁なる理想とかですね、高さという、そういうこのことを持った人格への表現というものにすべて共通するものがね、この価値への情熱であります。**

**そして、そのすべての中に存在するものが、ほかの人よりもよりたくさんの知識と技術と教養の量なんですよね。だけど、それは結果だ。人格の高さの根本原理は価値への情熱だ。われわれは、果たして、俺の中に、この価値への情熱が燃え盛っておるか。それを常にわれわれは自分自身に問わなければならない。それなくして人間ではない。その思いをですね、われわれは強く持って、仕事をし、また生活し、生きなければならない。なんで価値への情熱が大事なのかという根拠をね、ちゃんと押さえておいてもらいたい。人間は価値の世界に住む存在である。価値の世界は人間のみ固有の存在領域である。人間は価値の世界に住んでおるんだ。そして、人間の心とはなんなのか。心とは、意味と価値を感じる感性だ。意味と価値を感じる感性を成長させていかなければ、心は成長しない。心は発達しない。**

**じゃあ、どうすれば、その意味や価値を成長させること、意味や価値を感じる感性を、意味や価値を感じる心を成長させることができるのか。自分の中からさしたる、この価値への情熱が湧いてこないとするならば、どうすれば、価値への情熱をですね、自分の命に燃え盛らせることができるのか。そのことを、考えなければならない。激しいこの価値への渇望がですね、自分の中にないとするならばどうするか。そのために、われわれは理性という能力を手段能力として持っておるわけであります。理性という能力は、人間においては手段能力であって、人間は理性に支配されてはならない。理性の奴隷になってはならない。人間は理性を使いこなさなければ、人間ではない。どういうふうにして、理性を使いこなすのか。そのためには、理性を手段能力に使って、心を育てる。理性を手段能力に使って、感性を育てる。理性を手段能力に使って、命を育む。そのことを考えなければならない。理性は手段能力だ。われわれは、それを使いこなさなければならない。われわれは理性を支配しなければならない。理性に支配されては、人間ではない。理性に支配されたから、今、人類は人間性の崩壊というですね、この不幸な現実に見舞われてしまっておるわけであります。**

**人間性の崩壊とは、離婚の激増と幼児の虐待と、そして違いを理由に戦争をする。これがまさに人間性が崩壊した姿の象徴だ。われわれ、理性能力を手段能力に使って、自らが人間として成長していく道筋をつくっていかなければならない。どうすれば、自分の命から、価値への情熱を燃え盛らせるというですね、そういうことができるのか。そのためには、われわれ理性というものを手段能力に使ってですね、理性を手段能力に使って、今、自分がしておる仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考えなければならない。今、自分のしておる仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを考える。そうすると、理性が考えた価値を感じる感性がだんだん成長してくる。心が成長してくる。そして、感性を感じたとき、興味や関心が湧いてきて、そして、それを求める気持ちが湧き上がる。そして、われわれは、価値への情熱をつくり出すのであります。**

**社員教育をする場合でもですね、学校教育をする場合でも、教育というものの中に何が必要なのか。それは、その知識や技術や教養を教えるという、この手段を通してですね、自分は社員の心の中に、あるいは、学生の中に、どこまでもより高度なものを、厳密なものを求めていきたいという価値への情熱を呼び覚ますために、このより高度な知識を教えるという行為を自分がしてるんだという自覚が教える側になかったならば、社員に価値への情熱は目覚めません。また、教える側だけにあったんでは、まだ教育効果は低い。学ぶ側においてもですね、自分がより高度な知識を求めていくという、この作業をしておるのは、また、させられておるのは、自分の命の中にどこまでもより高度なものを求めていきたいという情熱をつくるために、この行為をしてるんだという自覚がなければならない。この教える側の意識と学ぶ側の意識の、この一致というかですね、この共鳴がですね、互いに共鳴し合う。この教える側と学ぶ側における心の共鳴が教育効果を高めていって、そして、この素晴らしい相乗効果というものを生み出すことができるわけであります。**

**皆さん方がいろいろ、こうやって研修をですね、受けたり、あるいは、いろんなそういう、この勉強をなさるときにね、ぜひ、それを単に知識を習得するだけのこととして終わらせてはなりません。自分がその行為をしてること自身がですね、自分の中にどこまでもより高度なものを、厳密なものを、より真実なるものを求めていきたいという気持ちを育むために俺はこれをやってる。そういう思いがあったならば、その心は、その心は育ってきます。そして、教える側のほうにもね、自分がより高度なものを与えようとしておると、この活動そのものがですね、それを聞いてる人々の心の中に価値への情熱を呼び覚ますことになってるんだ。それを呼び覚ますことができなかったら、俺の教え方が間違ってるんだ。俺は人間を育ててるんじゃない。そういうこの意識がですね、教える側にもなければなりません。その共通する思いがあって、初めて教育は成果を上げることができるわけであります。**

**そのためにも、まず、そのためにも、方法論としてはですね、この自分の理性というものを使いながらですね、理性を手段能力に使って、今、自分のしておる仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさについて考えるという作業をですね、まず、われわれはしなければならない。意味や価値や値打ちや素晴らしさについて考えるということをしないと、それを感じる感性は成長しません。理性を使って感性を成長させる。理性を使って心を成長させるとは、そういうことをすることです。その人が、今、自分のやってることにどの程度、打ち込めるかは、その人が、その仕事にどの程度の意味を感じてるかによって決定されるわけです。人間は、今、自分のやってることに、自分が感じてる、その価値以上の打ち込み方はできません。どの程度の仕事の仕方をするかは、その人が、その仕事にどの程度の魅力を感じてるかに比例するわけであります。だから、より高度な意味、より深い意味をですね、その人間がこの感じ取ることができる状態になればなるほど、その人は、その仕事に対する打ち込み方が違ってくる。そして、人間が最高に意味を感じたならば、人間が最高の意味や価値や値打ちや素晴らしさを感じたら、人間はどうなるか。そのとき、人間は、俺はもうこのためだったら死んでもいい。俺はもうこのためだったら命もいらん。このことのために生きて、このことのために死ねたら、もう俺は最高の人生だ。何も言うことはないという思いが湧いてくる。実際問題、そういう思いで仕事をし、また、そういう思いで生きてる人もいっぱいおります。**

**人間のしておることの中にはですね、意味や価値のないものはない。今、自分のやってることにどういう意味を感じながらやってるか。どういう価値や素晴らしさを感じながら、そのことをしてるか。それがその人間が生きる人生の深さを決定する。また価値を決定する。意味を感じないで、何かをしてるということは、意味のないことをしてるんだ。価値を感じないでそれをしてるということは、価値のないことをしてるんだ。人間は意味や価値のない人生を生きてはならない。意味や価値を感じてこそ人生。意味や価値を感じてこそ人間だ。意味も感じず、価値も感じず、素晴らしさも感じないで、ただ肉体を動かしておったら物体だ。奴隷だ。人間ではない。人間であったならば、今、自分のしてることになんらかの意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じてなければ、人間ではない。意味を感じないでやっとったら、自分は意味のない人生を、そのときには生きてるんだ。価値を感じないで、そんなことをしておったら、価値のないことをしてるんだ。それがどうして幸せか。そこにどうして成功という結果が生まれてくるのか。**

**意味を感じないで、価値を感じないで、仕事をしておったんでは、そこにはむなしさしかない。愚痴しか出てこない。命が燃えるはずはない。その人の人生は不幸そのものだ。意味を感じてこそ、幸せ。価値を感じてこそ、幸せ。だからこそ、今、自分のしてることに、われわれ、必死になって、意味や価値を探し求めなければならない。どの程度の意味を感じるか。それがその人がどの程度、幸せかを決定するわけだ。どんな仕事も価値のない仕事はない。どんな仕事でも、他に置き換え難い素晴らしい値打ちを持っておる。意味を持っておる。どの程度の意味と価値を感じるかが、どの程度、幸せかを決定するんだ。また、どの程度、その仕事に打ち込めるかを決定するんだ。とにかく人間が住む世界は価値の世界だ。人間の心は、意味と価値を感じる感性だ。意味を感じずして、価値を感じずして、何が人生だ。何が人間だ。意味を感じてこそ人生だ。価値を感じてこそ人間だ。感じてこそ燃えるんだ。燃えてこそ人生だ。**

**どんな仕事にも素晴らしい意味がある。仕事が違うということは、どんな仕事でも、他に置き換え難い意味と価値と値打ちと素晴らしさをみんな持ってるんだ。どんな仕事でもですね、この仕事をせんことには、この醍醐味はわからんぞというものは、みんなある。仕事が違うということは、そこにはその仕事独特の醍醐味があるんだ。他に置き換え難いものがあるんだ。それをどう自分が見つけ出して、感じるかですね。ごみを拾ったりね、いろんなメンテナンス作業でお掃除をしたりね、そういうこの仕事もあるんですが、それはあんまり世間では評価されない。でも、評価されないから、つまらない仕事だというように思っとったら、とんでもないことであってですね、黙々と廊下を拭き、黙々とごみを拾い、黙々と手すりを磨いてる、その人たちの思いの中に何があるのか。俺はただ、ごみを拾ってんじゃないぞ。俺はごみを拾いながら、おまえら、威張って歩いてる人間たちの心の掃除をしてやってんだ。そういう思いがあったならばね、ごみを拾うという仕事のためだって、人間は死ねるんだ。どういうふうに自分の今、やってることを評価するかですね。今、自分のやってることの中にどういう価値を発見するか。どういう思いを持ってそのことをするか。それによっていかようにも人生は輝く。結局、幸せごとしか、幸せかどうかは自分の感性ですからね。他人が不幸だって言ったって、俺は幸せだって言うとったら、幸せなんですからね。幸せを感じてない人生は、本当、不幸ですよ。これ、当然ですけどね。幸せを感じてなきゃ、不幸。不幸な人生を生きてはならない。例え、他人がどう言おうと、自分は幸せな人生を生きなければならない。そのためには、そのことに意味を感じなきゃいかん。そのことに素晴らしさを感じなきゃいかん。でなきゃ、幸せなんて絶対出てこない。結局、人生はどれほどの意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じて生きてるか。それだけだ。とにかく自分が、本当にこう、幸せなですね、充実した悔いのない人生というものを送ろうと思ったら、意味を感じるしかない。価値を感じるしかない。素晴らしさを感じるしかない。それしかないんだ、人生は。感じてこそ人生だ。燃えてこそ人生だ。命から湧いてくるものがあってこその人生だ。命から湧いてくるものがない。感じない。燃えられない。もう死ぬしかないですね、これはもう。つまんない人生ですもん。生きてても、全然、おもろうない。楽しくない。じゃあ、もうあとは身を持ち崩すしかないですよ。**

**とにかくもういっぺんですね、皆さん方も、もちろん、そういうこの価値への欲求というものを持ってね、幸せになるために生きてらっしゃると思うんですけど、もういっぺん、このどこまでもより高度なものを求めていきたいという欲求は自分の中にあるかを確かめてみてもらいたいし、自分の中にどこまでも厳密なるものを追求したいという、この仕事における欲求はあってしてるかを、自分をもういっぺん確かめてみてもらいたい。そして、本当に自分がこの真実なるものを追求するというですね、誠実なですね、そのお客さんに対する態度、誠実な同僚に対する態度、本当に真なるものを追求してですね、自分を省みて恥ずかしくないという、そういうこの生き様に立って、自分が仕事をしてるかということをもういっぺん見つめ直してもらいたい。そして、どこまでも善なるものを追求する。もっともっと、このよいことをですね、もっともっと善といえることを追求していく。そういうこの飽くなきね、良心というものがですね、自分の中にあるかどうか。この程度でいいかっちゅうてですね、中途半端で終わってしまうような、そんなこの情けないね、人間ではいかんと思いますよね。**

**やっぱり、良心というものを呼び覚ましてですね、そして、どこまでもお客さんに本当に納得してもらえるような、また同僚に本当にこの納得してもらえるような、喜んでもらえるような、そういうこの関わり方、仕事の仕方、生き方がしたい。これは良心の問題ですからね。良心が人間の誠実さを支えるんですから。そういう、この良心がですね、自分の命の中でちゃんと生きて働いてくれてるかということをね、確かめなきゃならんと思います。良心が働かなくなったら、会社は犯罪の温床になりますからね。不正の温床になりますからね。これほど会社にとってもマイナスなことはないですよ。恐ろしいですよ、これは。一人ひとりのこの中に、良心の目覚めというものがですね、いきいきと働いてるかどうかということをですね、問い続けなければならない。それが誠実さの原理だ。**

**そして、いろんな事柄に美学を求めていく。美しい生き方がしたい。ただお化粧してね、美しくなったり、外を飾って美しくなるだけじゃなくって、仕事の仕方に美学を、生き様に美学を、行動に美学を、言葉に美学を、人間性そのものに美学を求めていく。そういうこの素晴らしい生き方を、ぜひしてもらいたい。そんなことを言ったって、私はできてませんけどね。私もできてませんけど、だけど、私もそういう自覚に基づいてね、努力だけはしてます。人間は皆、不完全ですから。俺はもう完璧にできてるといったら、それは傲慢になりますからね。どこまでも、より以上を求めて努力してると、その姿に人間があるんですからね。だけど、より以上を求めて生きるためには、目標がなければならない。どこまでも、より高度なものという目標がなかったならば、その生き方は出てきませんからね。どこまでもより厳密なもの。それがあるから、命に輝きが出てくる。命を輝かすのは価値への情熱だ。欲求がなかったならば、命は輝かない。だけど、命を輝かせる欲求は、価値への情熱だ。そういう価値への情熱がですね、人間性というものをですね、成長させる、進化させる。そして、いろんなものに、質におけるね、高度さというものをつくっていく基本原理ですからね。**

**とにかくわれわれ日本人はね、これからどういう生き方をしなきゃならんのか。日本人の使命は、全世界に、全人類に、最高品質のものを提供し続けるところにある。日本人の、日本民族の特性はですね、あらゆるものを最も完成度の高いものに仕上げてしまう。そこに日本民族の特性があるんですよ。日本民族は、感性民族だといわれる。その人間の感性が心だ。心の文化をつくったのは日本人だ。その心とはなんなのか。それは意味と価値を感じる感性だ。はばかりながら、日本人は、世界一の意味と価値を感じる民族なんだ。自分を振り返れば、そんなことはないと思うかもしれませんけどね、だけど、われわれの血の中には、われわれの血の中には、われわれの命の中に息づいた血の中には、あらゆるものを最高の完成度に仕上げてしまう血が流れてるんだ。完成度の高さにおいては、どの民族と比べても、人後に落ちない。それだけの能力をわれわれは民族として培ってきたし、持ってるんですよ。**

**これまでのですね、歴史というものをちゃんとちゃんとの味の素でですね、ちゃんとちゃんと振り返ればね、すぐわかることだ。平安時代に中国からね、寝殿造りに似たような建築様式が入ってきましたけど、だけど、中国から入ってきた建築は、非常に粗雑なもんだ。だけど、日本に入ってきたら、寝殿造りという、ただ建物だけじゃなくて、庭造りを含めた芸術が生まれてくる。仏さんでも、中国や韓国の仏様、非常に粗雑だと。だけども、鎌倉時代、運慶、快慶によってつくられた仏様は、まさに芸術作品だ。刀といったら、人を斬るためのもんだけどですね、だけど、日本人がつくる日本刀というのは、まさにこの独特の反りと、独特な刃形を持った芸術だ。仏教でも、それはインドでできたもんですけどもですね、インドにおいては、もう仏教の発展はとっくに終わってしまっておる。もうヒンズー教に吸収されてしまっておって、仏教独特の精神というものは、もう死んでしまった。また中国においても、仏教が興隆した時代はあったけど、いまや仏教は中国にはない。だけど、今、仏教は、最も最高のかたちを持って日本に存在するんだ。日本に存在する仏教が世界最高の仏教の姿である。**

**どうしてそれができたのか。それは鎌倉時代にですね、日本仏教と呼ばれるさまざまな、独特の個性を持った高僧たちがですね、どんどん生まれてきて、そして、インドや中国で育った仏教を最もこの完成度の高い、最も質の高い仏教に仕上げてしまった。道元が出、日蓮が出、法然が出、親鸞が出、一遍が出、独特の個性を持ったですね、この宗教観というものをつくった。中国でできた儒教老荘思想でもね、本国においては、もうほとんど研究者はまばらしかいない。もう中国本土においてはですね、儒教精神も仏教精神も死んだようなもんだ。だけど、まだ日本においては、儒教精神もですね、この陽明学とか朱子学とかって、いろんな形でですね、まだ日本においては、その伝統の精神が脈々と生きて、企業を経営するね、経営者の心の中に生きておるのが現実だ。また、老荘思想というのは、無為自然の道といわれて、道の思想といわれる。道の思想が、生活の中に本当に根付いておるのは日本だけだ。商売が商道になり、芸が芸道になり、剣の修行が剣道になり、柔術が柔道になり、花を生けるのが華道になり、茶を飲むのでさえ茶道になる。人間のあらゆる立ち居振る舞いが、みんな道の思想として花咲いておる。こんな素晴らしい文化は日本にしかない。**

**欧米人がつくった科学技術すらね、欧米人がつくった科学技術すら、もはや、その最先端、最も最先端の高度な科学は日本人が握ってるんだ。今の科学技術文明の最先端の利器は、これは携帯電話。携帯電話の８割の部品は日本製だ。最も品質の高い携帯電話を使おうと、つくろうと思ったらですね、日本人の技術を使わなければ、最も品質の高い携帯電話はできないんだ。科学技術で最も、この微細な世界であるナノミクロンという単位の技術は日本人の独壇場だ。誰も右に出る者はおらん。日本人こそ、あらゆるものをですね、最高の完成度に仕上げてしまう。そこに日本民族の特性がある。われわれ建築においても、全世界に最高品質の建築を提供し続ける努力をしなければならないし、また、アサヒグローバルのね、この建築精神が世界の頂点に立つ日を夢見ながらですね、皆さん方は、頑張らなきゃいかん。**

**今、日本人にはですね、今、自分のしておる仕事において、世界の頂点に立つことが求められてるんですよ。世界には常に世界一の人物がいるんだ。われわれがなれないはずはない。なろうと思ったらなれる。なろうと思おうという意志がないから、なれないだけだ。なろうと思ったら、どうしたらなれるのかを考えるからなれるんだ。なってしまうんだ。また、どれだけ強くなりたいという意欲を持つかですね。それだけが勝負だ。なろうと思ったらなれる。世界一の建築会社を目指すならば、実現できるんだ。その夢がなかったならば、実現はできませんよ。その志があったならば、アサヒグローバルは世界第一級の建築会社になる。それだけの可能性をわれわれは日本民族として、祖先の努力によって与えてもらってるんだ。われわれはどんなものでも、その最高の完成度の高いものをつくれるんだ。質においてトップに立つのは日本人の使命、歴史における役割だ。**

**もう実際問題、鉄でもですね、新日鉄の鉄は、生産量においてはね、韓国に追い抜かれ、中国に追い抜かれたかもしらんけど、最高品質の鉄は新日鉄だ。最高品質の鉄鋼製品をつくろうと思ったら、新日鉄の鉄を使わなければならない。新日鉄の鉄以外の鉄を使ったんでは二流品だ、三流品だ。世界が認めるですね、この評価だ。もう日本人は、家電においても、自動車においても、カメラにおいても、時計においても、いろんなもので世界一を極めた産業がたくさんある。だけど、これからは、あらゆる職業において世界の頂点を目指さなければならない。それはこれからのですね、日本人の歴史的使命であります。アメリカが世界の目標でなくなった現在、われわれ日本人が世界の目標に立たなければならない。世界の目標になってあげなければならない。これから全世界が日本を目標にやってくるんだ。その時代をつくらなければならない。そのためにも、われわれは価値への情熱に燃える以外にない。常に最高のものを提供し続けるんだ。安いものを買い、安いものをつくることにうつつを抜かしておったらいかん。われわれは、価値があるものだったら、どんだけでも金を出すぞ。高いものが買えることに誇りを感じる民族にならなきゃならん。**

**バブルのときみたいにね、世界からばかにされるような、価値もないようなものをですね、その何倍もの金を出して買うような、あんな恥ずかしいことはしたらいかん。その価値にふさわしい評価をちゃんとできて、その価値があったら、それだけの金を出して買える。そういうこの誇り高いですね、この価値観を持った民族にならなければならない。日本人はその価値評価力を持ってる。持ってるのに、自分が知らないだけだ。とにかく、これまでいっぱい、そういう世界最高のものをつくってきたんだから、世界最高のものをつくる価値評価力を持ってるんだ。だから、住宅においても、これまでの世界になかった、新しい、素晴らしい高品質の住宅を全世界に提供する夢に懸けなければならない。全世界の建築業者はね、アサヒグローバルを目標にやってくる。その時代をつくらなければならない。少なくとも、その夢に生きなければならない。そうしなければ、日本人は、この第３の過渡期を担ってですね、アメリカに代わって世界の指導者になるという、その夢が果たせないんだ。**

**アメリカはもうすでに世界から信望をなくしつつある。これから世界の目標になって、世界に役立つ仕事ができるのは日本人だ。中国はまだ200年先、インドはまだ500年先、ヨーロッパはもうすでに役割を果たし終えた。これから200年が、日本の独壇場の舞台だ。日本人しか、これからの世界を支えられない。ぜひ、そういうね、気概を持ってですね、同じ仕事をするんやったら、世界の頂点を目指す。その夢に生きるというね、そういうこの生き方をしてもらいたい。今、自分のしとる仕事において、俺たちは世界の頂点を目指すんだ。社長と夢を共にしてですね、世界の頂点を目指すために頑張るんだ。それは自分の幸せでもある。ひょっとして、ひょっとしたら、皆さん方一人ひとりが、外国の支店の社長さんになって、赴任せんといかんようなことになるかもしれませんからね。信じられないような人生が開けてくるかもしれない。夢は常に頂点を目指さなければならない。二番手ではいかん。三番手ではいかん。常にいつも思いは頂点に持っていなければならない。それが志、夢というものを立てる基本原理だ。われわれには、それを実現できる民族としての素質がある。ぜひ、この価値への情熱の素晴らしさというものをね、ぜひ感じてもらいたいと思います。じゃあ、ここで10分間、休憩を入れて、また後半の話をします。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の話をさせてもらいたいと思います。今、お話をしたのはですね、これは人格の高さをつくるための実践的原理というね、そういう観点から話をしました。だけど、人格というのは、人間は理性、感性、肉体というこの３つの要素からできてますから、だから、この実践的原理だけじゃなくて、精神的原理という面からもですね、人格の高さをつくる原理というものを考えなければなりません。そこで、その精神的な意識の面での努力としてですね、どういうことをするならば、人格の高さというものにさらにこの輝きというかですね、その成長を遂げさせることができるか。そんなことを、考えなければならない。そのためにはですね、まず、われわれは、自分の実感というものを思い出してもらいたいんですけども、自信のない人間に人格の高さは感じませんしね、また謙虚さのない人間に人格の高さは感じませんし、また理想のないような人間に人格の高さは感じません。まず、その点からですね、まず考えていかなければなりません。**

**人格の高さというものをつくっていくために、われわれが精神的な原理として意識しなければならない、まず第１番目は、自信ですね。これは社会において仕事をしていこうと思ったら、社会の中で生きようと思ったら、まず何が大事なのか。それは他人から信頼され、信用されることである。他人から信頼され、信用されるために、われわれが自らにおいて努力しなきゃならんことは、自信をつくることである。自信というものをつくる努力をしないと、他人から信頼され、信用されない。自分で自分を信じられないような人間を誰が信じてくれるんやと。やっぱり、自分で自分が信じられるという自分をつくっていってですね、確固たる自信を持って仕事をし、確固たる自信を持ってものを言い、確固たる自信を持って生きるというね、そういう姿を見せなければならない。**

**他人から信頼され、信用されるためにはですね、まず、その意味で、信頼、信用の基礎となる自信というものをつくる努力をしなければならない。自信というのはこう、自分で自分を信ずると書くわけですけども、その自信というものは、これ、自信というものは、これは湧いてくるものですよね。自信がこの命から、じしーんとこう、湧き上がってくるというね、そういうこの構造に持っていこうと思ったら、われわれは、まずその信じるに足る事項をつくる。信じるに足る事項をつくるって、そういう努力をしなければならない。だけども、この人格の高さという、この観点からですね、人格の高さという観点から自信をつくろうと思ったら、どういう原理があるか。それは、人格の高さというものは、知識の量と関係する。だから、人格の高さというものから、自信というものをですね、つくっていこうと思ったならば、われわれは知識というものの内容にですね、注目しなければならない。知識というものはですね、使わなければすぐ忘れてしまったり、また、いいかげんな、不確実なものになってしまいやすい。知識や技術や教養というものはですね、いったん覚えて獲得しても、使わなければね、すぐにこれは、いいかげんな、不確実な、自信のないものになってしまいやすい。**

**そのプロというふうにですね、言われる人間が、うっかり自分の口からですね、あまり確かな根拠もないような、あるいは、自分で十分に確信のないような、あやふやなことを口走ってしまったら、それがまさに信用失墜の引き金になってしまってですね、いっぺんに業績が落ちるということにこう、なってしまう可能性がある。それが現実の怖さですよ。いったん信用をなくしたら、たちまちにして業績は悪化する。知識というものの怖さをですね、われわれ、十分、知らなければならない。建築にしても、また事務的な仕事にしても、あらゆる仕事は知識と技術に支えられて成り立ってるんですからね。人間の行為の中にはすべて知識がその原理として働いておる。その知識に間違いがあったならば、われわれは成功へ自分の人生を導くことはできない。そのことを考えるならばですね、われわれは自分の中に、自分の中に、この不確実なるものを発見したならば、常にその不確実なるものを確実なるものに、確かなものに転換してくという努力をし続けなければならない。**

**これは不完全なる人間の誠実さというものであります。人間は決して完全、絶対はない。常に何かしら、不確実なるものを内に抱えながら生きてるんだ。だからこそ、その不確実なるものをですね、確実なものに転換し続けていくことの努力を、現役で仕事をしておるあいだは、し続けなければならない。それが、この消費者に対する誠実さである。また、同僚に対する誠実さである。また、人間としての誠実さである。人間としての正しい生き方である。自分の中に少しでも不確実なるものを発見したならば、常にそれを確実なるものに転換し続けるという努力をですね、していかなければならない。不確実なるものをいいかげんに放置してはならない。これは非常に大きなですね、この仕事上の命取りになりかねない大きな問題だ。自分の中にですね、その不確かなものがあるとどうなるかといったらですね、自分が不確かだなと思うようなものが自分の中にあったら、人間はそれが故にですね、行動力と実践力がなくなってくるんですよ。だいたい、知っておっても、それがちょっとはっきりしないとかですね、何かしら心もとないという人は、何かその先生が質問しようかなと思うとね、そのことについての知識がなんとなくあやふやだと、ふっと下を向いてしまったりしてね、当てられないようにするんですよね。不確実なるものを持っとる人間は、人生においても、仕事においても、あらゆる面で逃げ腰になる。行動力、実践力が鈍ってしまうんですね。**

**技術でもですね、一応は知っとるけど、なんかもうちょっと、実践的に自信がないということになってくるとね、本当、それをやらされるような状況になってくると、すぐそのやらされないように逃げてしまったりする。不確かなものを持っておる人間の人生は、その人生そのものもまた不確かで、心もとない不安なものになってしまう。その意味で知識は恐ろしい。持つならば、確実でなければならない。不確かで、この不確実な知識を持てば、自分の人生そのものが不確かで、不確実で、心もとない、不安なものになってしまう。そして、人間から行動力と実践力は失せてしまう。心理学的にはですね、実践力のない人間、また行動力のない人間というのは、その８割がね、その人が獲得して、内面において持っておるものの中に、何かしら、この不安な、不安定な、不確かなものがある。それが行動力を奪ってるんだというふうにいわれております。あとの20％は性格の問題だというんですよね。だけども、この性格というものもですね、その人が内に持っておるものに対して、その確かさというものを確信し始めれば、性格の弱さも乗り越えられるというふうにいわれる。それほどにですね、その人が生まれてから後に獲得したものが、自分の中でね、この確実というか、自信のあるものか、自信のないものかというのは、ものすごく大きな、その人の人生を左右する原理であります。**

**不確かなものを持つぐらいならば、全然持ってないほうがいい。最近はこんなことを言ったらいかんと言われるんですけども、「盲蛇に怖じず」という言葉があってですね、どこかで立派な人がですね、講演の途中で「盲蛇に怖じず」って言ったら、そういう目の障害を持った団体から猛烈な文句が出てきてね、盲ということは、これ、差別語だと。そんなことをあなたのような人が言うっちゅうことは、信じられないとか言ってですね、大問題になったことがあった。それに対して、小説家の水上勉さんがね、そんなことを言われたら、小説書けないと言ってですね、大問題で裁判になったんですよね。そのこともあって、盲という言葉を遣ったらいかんことになってる。だけど、一応、目の不自由な方と、こう言わないかんのですね。目の不自由な方は、蛇がおっても、蛇が見えないから、怖じずに進んでいくんですよね。だけど、なまじっか蛇を知ってるが故に、蛇がおるとおびえてしまって、逃げちゃったりして、行動力が鈍ってしまうと。そんないいかげんなことを知ってるぐらいなら、知らんほうがね、むしろ蛮勇を発揮して行動力が出てくるといわれるんですよね。いいかげんな知識を持っておるぐらいなら、ばかなほうがいいっちゅうか、もうなんにも知らんほうがいいと。**

**よく人生、ばかになれって言われますもんね。なまじっかな知識を持ってるから、不安になってくるんだ。まったく知らんほうが、蛮勇を発揮してね、そして、行動力が出てくると。それぐらい、とにかくは、知識というのは恐ろしいということをですね、まず、われわれ、知ってないといかん。どうせ持つからには、根拠が明確でですね、それが自分の自信につながるような知識の持ち方をしなければならないんですよね。だけどもですね、こういう情報化時代というふうにいわれるような、こういう状況の中ではね、あまりにも、その知識の量が多過ぎてですね、いかに自分の仕事に関係する知識だけとはいえ、またその知識がもう日進月歩ですね、どんどん新しい知恵が出てきて、本当にもう、この、それを追求することにもう、くたびれ果ててしまうと。そういう挫折感を感じるような人も随分と、いらっしゃる。また、その技術でもですね、技術の進歩は日進月歩だと。昨日までいいといわれておった知識が、もう今日は、もう使いものにならんと言われてしまったりしてですね、もう本当に、それも知識の発展にですね、自分が追い付いていくっちゅうことに挫折感を感じる人もいらっしゃる。**

**こういう情報化時代というふうにいわれるものに、どういうふうに対応しながらですね、社会を生き抜く自信というものを自分がつくっていったらよいのか。これも非常に大事な、これは問題なんですよね。特にその職業においてトップ、第一線でね、活躍をするという、そういうこの人間にとっては、これは非常に大きな問題であります。どういうふうにして自信を持ち続けるか。どういうふうにして自信というものを失わないようにですね、していけるか。これはなかなか仕事においても、もう１つ自信がなくってというふうな人も随分とサラリーマンの中にはいらっしゃるわけなんですけど、そのときにどうしたらよいのかということですね。その方法論はですね、とにかくこの自分の専門というふうに言うことができる分野をできるだけ狭く設定する。その間口が広いっちゅうかですね、いかにプロとはいえですね、その今、自分のしてる仕事のすべてをカバーしようと思ったらですね、残念ながら、その間口を広げれば高さが出ない。だけども、自分が専門と言える部分をできるだけ狭く設定してね、もうこれ以上、狭くならんというぐらい狭く設定すれば、ちょっと努力をすれば、すぐ高さが出る。これが存在感のつくり方。あるいは成長のさせ方の基本原理なんですね。だから、自分が存在感を持ち、命に輝きをですね、つくって、この情報化時代を自信を持って生きていこうと思ったならばですね、自分の専門という分野をですね、できるだけ狭く設定して、この、その分野というか、そのことに関してはね、なんでもできる。もうその時代の最先端のことまで全部知ってるという、そういうふうな分野を必ず１つは持ってないと人間は価値がない。このことについてだけは、どんな立派な、どんな偉い人にでも、ちゃんと教えて指導してあげることができるというですね、そういう分野を何かしら１つは持ってないと、人生はさみしい。このことにかけては、絶対に人後に落ちない。このことについては他人から一目置いてもらえるというね、そういうものを持つことがですね、人生を面白おかしく、楽しく愉快に生きて、仕事をしていくための重要な原理です。このことについては、もう最先端のね、最も高度なところまで、全部、自分はものにしてる。その自信を持ち続けるために努力をする。それ、易しいんですよ。分野をこの領域を狭めればですね、最先端まですぐいけるんですよ。あとはその力を維持してですね、そして、その新しく出てくる、その分野で新しく出てくる、その知識とか、技術というものを吸収していくというだけの努力でその力は維持できますのでね。非常にこれは簡単なんです。**

**だけども、あれもこれもできるという状態に自分をしていこうと思うと、それがですね、残念ながら、この自分が自信が持てないというふうな、そういうこの状態にですね、なってしまう、このきっかけになってくる。大事なことは、人間には長所、短所あるんですからね、だから、このことについては、もうどんな人にでもちゃんと教えてあげることができる、指導できる。そういうものを何か１つ、つくっておいてですね、そして、その分野をちょっとでも外れたならばですね、人に聞くか、助けてもらうかということをですね、して、そして、その自分の磨き抜いた、その独特の分野の力で他人の役に立つという、その生き方を求めていくと。そういうふうなですね、関わり方をするのが、これから少数精鋭という組織をつくっていくための方法論なんですね。**

**会社というのは、専門家のこの横の関わりというかですね、専門家のネットワークとして会社というのは存在するというのが、これからの横型社会における望ましいカンパニーの姿だ。全社員がなんらかのエキスパートだと。このことについては、あいつに聞いたら全部わかる。そういう分野をみんなが持っててですね、そして、このことについては任せておいてくれ。このことについては責任を持つ。そういうこの集団がですね、カンパニーになっていく。それがまた企業の質を高めていってですね、社格を高めていく非常に大事な方法論であります。このことについては、私に任せておいてというものをね、何かしら自分が持てるようなね、そういう自分に、自分で自分を教育していくということを心掛けなければならない。そして、自分の専門がちょっとでも外れたならばですね、謙虚に、誰にでも聞いて教えてもらう。また誰かに助けてくださいといって助けてもらって、協力してもらって、そして、やっていくと。助けてもらうことによって感謝をする。また、自分が自分のその素晴らしい能力を持って、相手の役に立ってあげることによって、相手に感謝してもらう。この感謝の応答関係が、社会であり、組織だ。**

**これからは、愛を原理にした組織をつくっていかないかん時代ですからね。だから、助けてもらうことに、われわれは引け目を感じてはいかん。助けてもらうことが人間だ。助けてもらわなければ人間ではない。助けてもらうことは、相手の役に立つことと同等の価値があるということをですね、われわれは知る必要があります。助けてもらったら、何かこう、引け目を感じる。自分の弱さを感じるようではいけない。人間にはどんな人間でも長所、短所がある。短所は相手に助けてもらって感謝ができる。短所があるから、人間らしい謙虚な心を持てる。短所は感謝するための原理だ。感謝ができないような人間では、人間ではない。他人のために役に立って、感謝してもらい、他人から助けてもらって感謝をする。感謝をするために短所は必要だ。堂々と助けてもらって感謝ができることをですね、この人間性として価値があるということを認める。それを許すことができるような組織をつくっていかなければ、互いに助け合って、協力し合って、人間的なですね、この温かみのある関わり方というものを持ったカンパニー、企業というものはつくれません。**

**助けてもらうことに引け目を感じて、なんでもかんでも自分でできる人間が素晴らしいと思ったら、それはもう古い時代のですね、組織のあり方であり、古い時代の人間の生き方だ。これからの人間は、助けてもらうことに、誇りを感じるということもないんだけど、堂々とね、助けてもらうことを喜びとする。そういう助けてもらうことは、相手の役に立つことと同等の価値があるんだというね、この意識をですね、われわれは養わなければなりません。助けてもらって、感謝をする。それが人間として素晴らしいということをね、忘れないようにしてもらいたい。その代わり、人に助けてもらうばっかりでね、全然役に立たんようじゃ、具合悪いですから。やっぱり、この点においては、誰でも助けてあげることができる。そういうこの他人から一目置かれるような存在感のある能力というものをつくることが、またこれはどうしてもですね、この人間として自信を持って人生を生きていくために大事なことだ。だけど、その自信がなかなかつくれなくって、みんな苦労してる。弱ってるんですよ。ぜひぜひ、その自信のつくり方というのをね、ぜひこのみんな、ちゃんとわかって、何か１つですね、何か１つでいいから、このことに関してだけは俺に任せておいてくれと。どんな人にでも言えるというね、そういうものを持つ努力をしてもらいたい。**

**これは簡単なんですから、とにかくは。ある１つのことに絞ってですね、このことについては、もう一番高度なところまで全部わかってる、全部知ってる。またなんでもできる。そういうものを何かしら１つを持つことがね、自分というものの存在証明なんですよね。それが自分の価値を、この仕事においても、社会においても、つくり出す。何をもって自分は存在感をつくろうか。何をもって他人から一目置かれる人間になるのかを早く決めなければならない。いっときも早く。それがとにかくは、社会を、また会社の生活で面白おかしく、楽しく愉快に生きていくための原理なんだ。だけども、その他人の役に立つだけでは、本当は楽しく愉快に生きていくことはできない。助けてもらう喜び、助けてもらって感謝する、この人間性というものをつくっていかないと、組織は機能しない。明るく、堂々と、素直に自分を開いて助けてもらう。そして、ありがとうとこう、明るい気持ちで言える。それが素晴らしい人間性なんだ。助けてもらわないことが素晴らしいんじゃない。助けてもらうことが素晴らしいんだ。**

**情報化時代というものをですね、本当にこの力強く、自信を持って生きていこうと思ったら、助けてもらわなければならない。助けてもらわなければ、自信ができないんですよ。助けてもらえる人間にならないと、情報化時代は生き延びられません。助けてあげるだけでは苦しい。たくさんの人に助けてもらえる自分をつくらないかん。そのためには、自分の短所を知っておって、堂々と明るく助けてくださいといって、助けてもらって、そして、堂々と感謝をして、そういうこの謙虚なですね、明るい、気持ちのいい人間性というものをつくっていく。それがこれからの時代において、自信というものを持ってですね、この生きていく大事な方法論です。自信というのは、単によくできるから自信があるんじゃない。助けてもらう自信も大事なんだ。助けてもらう勇気を持たなければならない。助けてもらって、本当に心から明るく感謝ができるという人間性をつくっていかないと、この長所もあり、短所もあり、長所半分、短所半分という構造で成り立っておる人間が、組織の中で生きることは絶対できませんよ。組織の中で自分の価値を発揮し、組織の中で自分の人生の幸せを追求しようと思ったら、助けてもらって、感謝することが大事です。その代わり、助けてあげる力もつくっておかないと、利用するばっかじゃ、これはいけませんからね。相手の役に立って、相手から感謝してもらえるものもつくっておかないかん。この感謝の応答関係が、愛を原理にした組織、社会のこの基本的なあり方だ。それであって初めて、組織は互いに心を開いて、助け合う関係で、最高の仕事ができるんですよ。それぞれの人が持っておる最高の能力をね、最高の能力を組み合わせて、最高の品質のものをつくろうと思ったら、助け合わなければできませんから、絶対に。一人ひとりが、そのことにおいて最高のレベルのものを持ってて、そして助け合うから、最高品質のものが可能になるんですよ。最高の仕事をするために、われわれは自分が自信を持って、自分を信じて生きていけるという力をね、つくる必要がある。自信を持って助けてあげて、自信を持って助けてもらう。この感謝の応答関係が組織の動脈だ。組織といっても、栓ずるところ人間ですからね。人間の知識と人間の技術と人間の協力が組織ですから。その知識と技術が確かで、そして、人間関係の中に感謝の応答関係がある。それは組織の基本ですよ。**

**特にこれからは、縦型社会から横型社会へと変わっていくんですからね。昔のように、単なる上意下達という構造を持った、そういう命令の流れだけがね、組織の動脈じゃない。これからは、組織の動脈は横に流れる。その力にね、動脈がある。それが組織を活性化する。互いを生かし合う活人力を持ってね、互いが互いを生かし合う活人力を持って、互いに相手を生かし切ろうとするね、そういう力が組織の活力を生んでくるんですよ。自分は相手によって生かされて、自分は相手を生かし切る。この活人力を互いに持ち合って関わるところにですね、組織の活力は生まれてきます。関わることが、最高にうれしいというね。あいつは俺を最高に生かしてくれる。また、俺もあいつを最高に生かす。そういう関係性がね、横型社会の組織の理想であります。そのために、われわれは助けてもらわなければならない。また、助けてあげる力をつくらなければならない。そうして、お互いに尊敬し合えるんだ。その尊敬の心が、人格の高さをね、相手に感じさせるということになるんです。**

**そういうふうにして、現実を生き抜く自信というものをね、不完全なる人間でありながらもね、自分を信じて生きていける。不完全な人間でありながらも、自分を信じて生きていくためにはね、助けてあげるだけではいかん。助けてもらう力をつくっていかないと、不完全なる人間において、自信を持って生きていくという現実はあり得ない。助けてもらわん自信は傲慢だ。傲慢さほど、人間にとって醜いものはない。傲慢な表情、傲慢な態度、傲慢な物言い、これは人間にとって恥ずかしいもんだ。助けてあげて、助けてもらえる力が人間性だ。それが長所と短所を備えた人間性のあり方だ。だから、人間性とは傲慢ではないということだ。人間性は、イコール謙虚ではない。謙虚というのは、短所がつくってくれる人間の要素である。長所は自信をつくる原理である。長所から出てくる自信と、短所から出てくる謙虚さが相まって、傲慢ではないという人間性をつくってくれる。人間性とは謙虚ではない。人間性とは傲慢ではないという、この意識であります。**

**傲慢ではないという意識を持つためには、自信がなければならない。だけども、自信だけじゃ、自信過剰になってしまう。自信の裏に謙虚さが付いたとき、初めて人間には傲慢ではないという、この人間の格が生まれてくる。それが人間性だ。人間性とは、傲慢ではないという個の自覚である。謙虚さは人間性ではない。謙虚さに偏ってしまったら、価値のない人間だ。どんなに謙虚であっても、強さと自信というものがなかったら、謙虚さというものは人間において価値を持たない。力のない人間の謙虚さは、こびへつらえだ。素晴らしい能力があってこそね、謙虚にすると、あんなすごい能力を持ってるのに、なんて謙虚な方なんでしょうと、こういって褒められるんだ。だけど、力のない人間は、能力のない人間はですね、自分にはこういう駄目なところがあるんですって言ってもね、その能力や力のない人間が、自分にはこういう駄目なところがあるんですって言ったら、やっぱりそれはいかんわなと言われてしまう。だけど、力のある人間が、自分にはこういう駄目なところがあるんですと言うと、立派な人やとか言われる。力のない人間が自分の短所をこういう駄目なところがあるんです。それはいかんわなと。なんとかしろよと言われてしまう。**

**謙虚さだけでは、人間の価値がない。自信だけでは、また人間としての価値がない。両方合わさって人間性だと。だから、人間性とは、傲慢ではないという意識である。傲慢であってはならないという自覚である。それが人間性だ。だから、まずわれわれは、自信をつくらなければならない。他人から一目置かれるものを持たなければ、人間としての自信を持って人生を生きていくことはできない。だけども、この不完全なる人間が社会の現実を生き抜いていこうと思ったら、人の役に立つ、そういうこの能力をですね、つくっていくということと同時に、助けてもらえる力をつくらなければ人間ではない。人の能力を使わせてもらってですね、相手の能力を輝かせる。相手の能力を輝かせるために、自分が役に立つような関係性が持てなければ、人間として社会を、素晴らしい生き方として生きていくことはできません。活人力を持たなければ、これからの社会は生きにくいんだ。相手を輝かせてあげることが、横型社会のね、非常に大事な関係性だ。自分が相手を輝かせてあげる。相手は自分を輝かせてくれる。この応答関係がね、パートナーシップですから。堂々と助けてもらって、喜んで、感謝をする。その代わり、自分にも相手に何か助けてあげるものを持ってる。そういうこの自信をですね、ぜひつくってもらいたいと。それが人間としての人格の高さであります。長所も生かし、短所も生かす。そのことによって、人格の高さは生まれてきます。**

**２番目のですね、この原理は、謙虚さのない人間に人格の高さは感じない。謙虚さというものをどうつくるかですね。謙虚さというものも、これは謙虚にしなくちゃ、謙虚にしなくちゃって、謙虚、謙虚、謙虚、謙虚じゃ、なんとなく鳥が鳴いてるみたいですからね。だから、謙虚さというものがにじみ出てくるという、そういう状況じゃないと、謙虚にしなくちゃ、謙虚にしなくちゃっていう作為があったのでは、謙虚じゃない。わざとらし過ぎる。謙虚さもやっぱり自信と同じで、命からにじみ出てくる、湧いてくるというね、もので、初めて身に付いたものだ。そうでなかったら、価値がないと。どうすれば謙虚さというものがですね、こうにじみ出てくるという、そういう状況になるのか。今の人間にとってですね、謙虚さというものをつくる最も大事な原理は、理性という能力に対する意識、自覚なんですね。これまでの人類は、理性というものに対して絶対的な信頼を持ってきた。理性能力を間違いなく使うならばですね、誰もがそうだと認めなければならない、絶対的に正しい回答に到達できるんだ。真理は１つだ。本当のものは１つしかないというね、そういうこの確信が理性にはあった。現在でも、学者というふうにいわれてる人間は、理性しか信じることができるものはないからね、みんなまだまだ理性の盲信。理性しか信じられない。理性で考えたことは確実だ。そういうこの思いを持って、まだまだ研究してます。**

**だけど、それが残念ながら、この離婚の激増と幼児の虐待と、そして、この違いを理由に戦うという、そういう人間性をつくってしまったんだ。われわれは、もはや理性のみを信じて生きていくことはできない。これ以上、人間が理性的になってしまったのでは、世界の秩序はすべてが崩壊する。理性は真理は１つと考えて、全人類を画一化しようとするね、そういうこの働きをするのが、この理性であって、理性はみんなに共通するものをつくることが理性のこの働きですからね。どうしても理性を原理にすれば個性は死ぬ。理性の原理にしたら、違いは許せない。許せないから、殺し合うんだ。いつまでもそんなことをやっとったらいかん。だから、今の時代を生きる人間にとって、一番大事な謙虚さは、理性的な謙虚さ、謙虚な理性というものをどうつくるかということに全人類が懸けなければならない。それなしには、あのパレスチナとイスラエルの不毛の戦争はなくなりません。離婚の激増は食い止められません。養女の虐待は増え続けます。**

**今のわれわれにとって一番大事な謙虚さは、理性的な謙虚さ。謙虚な理性というものをどう持つかだ。本当に謙虚さが命からにじみ出てくるというね、作為を離れて、謙虚であらざるを得ない。謙虚にならざるを得ない。そういうこの人格、そういう人間性というものをつくるためにはですね、われわれは理性というものに対する原理的な反省が今、要求されておるんだ。これから、われわれは、違いを理由に戦う、違いを理由に対立するという時代からね、違うんだから教え合えるじゃないか。違うんだから学び合えるじゃないか。違うんだから助け合えるじゃないか。違うんだから協力できる。そういう時代をこれからつくっていかないかんのですから。いつまでも違いということを闘いの、対立の原因にしておるようじゃ、人間性は全然成長してない。いつまでも、そんな段階にとどまっておったらいかん。もっと素晴らしい生き方ができるんだ。**

**もはや今、人類は、勝つこと以上の素晴らしさを見いだしつつある。これまでは、勝たないかん。負けとったらいかん。そう言われてね、勝つことに最高の喜びを見いだしておった。だけども、いまや勝ったら負けるものをつくってしまう。勝っても負けるものをつくってしまうと、負けた者の悲惨さが、負けた者の恨みが、勝った国をも不安に陥れる。それが今の世界だ。アメリカはいまや勝ってしまったがためにですね、この中東地域における貧しい国家のテロの目標になっておる。アメリカはまさに今、テロにおびえる社会だ。われわれは、いまや勝つことに最高の喜びを見いだすような、単純な生き方をしてはならない。人間には勝つことよりも、もっと素晴らしいことがある。それはなんなのか。勝つことよりも、もっと素晴らしいことは力を合わせることだ。勝ったら、負けるものをつくってしまうんだ。力を合わせれば共に成長できるんだ。それが勝つこと以上の価値だ。**

**勝って、勝った勝ったといって喜んでるほど単純な軽薄なことはない。そういう次元をわれわれは超えて成長していかなければならないときが来たんだ。その意味においてもですね、われわれは違いを理由に対立するというね、そういう構造を持った社会を超えていかなければならない。だけど、まだまだ今の社会は、政治においてもね、考え方の違いによって党ができ、対立し合って政権の取り合いをする。まだまだそういう低い次元の政治だ。経済社会においても、同業者がたくさんおったならば、そこには弱肉強食の闘いが生じる。致し方ないと言ってる。だけども、その対立というですね、永遠に続くこの対立という、この現象、いまやライバル会社をぶっ倒せと言ってですね、そういう醜いこの経営をするという段階からですね、経営品質が問われて、経営にも品格があるというふうにいわれるようになってきたがためにね、現実に存在する対立という、この関係性を、相手を倒す方向に持っていってしまうんじゃなくって、自分自信の内的な変革、すなわち自己変身、自己創造、自己変革の力に変えていって、現実に存在する対立というエネルギーを業態の転換にこの生かしていくというね、そういう仕方で今、産業界は動き始めておるわけであります。**

**その意味においてもですね、いつまでも勝ち負けを意識して、競争意識を鼻先にぶら下げながら、醜い生き方をしてはならない。もう競争意識を鼻先にぶら下げながら仕事をし、経営をする。そういうこの人間は醜い人間なんだ。競争という意識がいかに人間の心をむしばみ、競争という意識がいかに人間を破壊するか。もうこれは全人類が知ってしまった事実だ。競争はむなしい。だけど、まだまだね、古い価値観にとらわれて、競争しか成長発達の原理はない。これからまさに世界はグローバル化していって、これからまさに世界大競争が始まるんだっていってね、競争をあおり立ててる、この心ない文化人がいる。それは過去の価値観にとらわれた、古い考え方だ。われわれは、自然の摂理というものの中にはですね、弱肉強食という原理もあるけど、もう１つ、適者生存という原理があることを忘れてはならない。これまでは、弱肉強食という原理で発展してきた。だけども、その原理の役割は終わったんだ。これからは、弱肉強食というこの競争原理にのっとって生きていくんじゃなくって、もう１段高いレベルのですね、適者生存という原理にのっとって生きることを考えなければならない。**

**企業が利益を上げていくための基本原理は、消費者の要望にどれだけ的確に応え続けるかということだ。また消費者にどれだけの夢を与えることができるかだ。それが企業が発展し、企業が成長し、利益を上げていく基本原理だ。また企業存続の原理は、歴史の要請にどこまで応え続けることができるかだ。それが企業存続の原理だ。それしかないんだ。だから、これからは、企業というものは、適者生存という自然の摂理を原理にして経営を考えなければならない。そういう段階に入った。弱肉強食という原理の役割は終わったんだ。そのレベルを、その段階を超えてですね、われわれは新しい、もう１つの自然の摂理にのっとった発展成長を考えなければならないところまで、人間の意識は成長してきたんだ。この大きな時代の転換期、この価値観の転換というものをですね、いち早くつかみ取って、その転換の先駆けをするというかですね、その新しい価値観にのっとって仕事をしていく。それで初めて新しい時代を切り開いていくですね、リーダーシップが取れる。**

**とにかく違いを理由に対立する時代は終わったんだ。今、違うんだから、助け合える。違うんだから、学び合える。違うんだから、教え合える。その関係性を価値観として重要視する時代に入るんだ。理性で生きたならば、違いは絶対に許せない。最終的には殺し合わなければならない。理性は矛盾を許さないんだ。違いを許さない。最終的には真理は１つなんだ。最終的にはみんなが同じにならんといかんのだ。それが理性だ。そういう理性を原理にしてですね、生きる近代という時代から、われわれ、脱却していかなければならない。これまでのわれわれの理性に対する意識はですね、今さっき、私が申し上げたようなことだと。だけども、本当に理性というのはね、そういうこの『完全無欠のロックンローラー』なのかどうかっちゅうことをですね、よくもういっぺん確かめてみなきゃならん。これまでは理性というのはですね、神から人間に与えられた能力だ。神から人間に与えられた能力だから、理性は神的なもんだ。だから、不完全な人間は理性に従うしかないんだというね、単純な考え方をしておった。だけど、本当に理性は、神から人間に与えられたものかどうかっちゅうことを、もういっぺん原点に返って考え直してみなければならない。**

**そのためには、1920年にですね、インドで発見されたオオカミ少女の、あのことをですね、思い出す必要がある。もし理性というものがですね、本当に人間に天から、神から与えられた潜在する能力であったならばですね、潜在的に持っておるものであったならば、例えオオカミに育てられようともですね、もういっぺん人間に戻そう、潜在する能力なんだから、それを引っ張り出そうと思ったら、出てこなければならなかった。だけども、残念ながら、オオカミ少女は、オオカミの習性を持ってしまって、もう永久に理性という能力をこの表現することはできなかった。ということは、理性という能力は、先天的に人間に与えられたですね、潜在能力じゃないんだ。じゃあ、いったい理性はどういう能力なのか。人間は確かに140億個という脳細胞を持って生まれてくる。だけど、脳は精神ではない。脳は理性ではない。脳は肉体だ。この肉体である脳がですね、考えるという力を持つためにはどういうことをセントバーナードなのかですね、それを考えないかんと。**

**この脳がですね、考えるっていう力を持つためには、どういう順序が必要か。まずは脳が、人間がつくった言葉を覚えなければならない。脳が人間のつくった言葉を覚えて、そして、言葉と言葉とを事実に合うように結び付けていくという作業をすると、合理的に考えるという理性ができてくる。理性という能力は、言葉の存在を前提にするんだ。言葉がなかったら理性はないんだ。動物でも考えますよね。鳥でも考えてる。犬でも考えてる。昆虫でも考えてる。だけど、昆虫が考えるのと、人間が考えるのは、次元が違う。昆虫が考えるのは、体験的記憶を結合してるんだ。人間が考えるのは、言葉を結び付けてるんだ。抽象概念を結び付けてるんだ。次元が違う。理性という能力は、人間がつくった言葉を脳が覚えて、言葉と言葉とを事実に合うように結び付けていくというのが、正しい考え方ということなんですね。それが合理的に考えるという能力の出てくる理由だ。合理的とは、事実に合うように考えるということが基本なんだ。そこから始まるんだ。**

**だから、科学において実証するとはなんなのか。それは自分の考えたことを事実に当てはめてみて、そして、自分の考えたことが事実に当てはめて矛盾しないかどうか。事実に合ってたら正しい。事実に合わんかったら間違いで、もういっぺん考え直そう。それが科学だ。サイエンスだ。合理性の基準はそこにある。そういうふうに考えればですね、理性と能力は決して人間が、人類が持って生まれてくる能力や潜在能力ではない。理性こそ、まさに人間が後天的につくった能力だ。だからこそ、人間しか持ってないんだ。だからこそ、動物にはないんだ。人間がつくった能力なんだから、人間的な能力なんだ。人間的な能力なんだから、不完全な能力なんだ。**

**じゃあ、どういう意味で理性は不完全なのか。それは、理性は確かに合理的に考えることができる素晴らしい能力であるけども、だけども、理性は合理的にしか考えることができない能力である。理性は合理的にしか考えることができないんだ。そこに限界があるんだ。理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。だけど、それは理性に対する否定的な解釈だ。どんな物事にも必ずマイナス面とプラス面がある。どんなことでも、マイナスの効果とプラスの効果を持ってるんだ。小泉さんが、どんな素晴らしい改革をしようとも、改革をすれば、そのことによって得をする人間と損をする人間が半分ずつ出てくる。いかなる善なる行為も、完全なる善はない。どんな善なる行為をしても、人間は何かをすれば、そのことによって利益を得る人間と、そのことによって不利益を被る人間が必ず半分はあるんだ。そのことを忘れてはならない。大政治家というのは、自分がやった結果、不利益を被る人間たちへの配慮を忘れない。それが大政治家だ。いいことをしたんだから、やった結果はいいんだと思ってね、自分がやったこと、結果において不利益を被る人間への配慮を忘れたら、これは軽薄なですね、片手落ちの政治である。政治は常に全体を見なければならない。どんなことでも必ずマイナス面がある。このマイナス面に対する配慮というものをどうするか。そこに心温かな人間性というものがあるかどうかが決まるんだ。**

**理性という面でもですね、理性というのは、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だ。これは理性に対するマイナスの評価だ。じゃあ、理性に対するプラスの評価とはなんなのか。理性のプラスの価値はなんなのか。その理性という能力は、絶対にこうだというようなことを言うことはできませんけども、理性という能力はよりよいことを考えることができる能力。そこに理性のプラスの価値がある。なんで理性は、よりよいことを考えることができる能力というふうに言うことができるのか。それは理性という能力はうそを言うことができる。うそを言うっちゅうことは、事実ではないことを言うことだ。理性は本当のことも言えるけれども、事実に合ったことも言えるけども、事実ではないことも言うことができる。そこに理性のですね、積極的な価値がある。うそを言うっちゅうことは、社会的には、倫理的には、いかんっちゅうように、こう言われるんですけど、だけど、それはその人間的なね、人間的な偏ったですね、ものの見方で、そういうふうに評価されるだけであって、理性は本当のことも言えるけども、うそも言えるという、この幅がある能力なんですね。**

**うそを言うということは、事実ではないことを言うことなんだ。事実というのは、現在と過去しかない。だから、事実ではないことを言うことができる能力を持っとるが故に、人間は未来に対応できると。未来はまだ事実ではない。だから、理性は未来に関係する能力だ。人間にとって未来とはなんなのか。未来とは、夢であり、希望であり、理想であり、理念、志、目的という世界だ。それがまだ事実になってない。だからこそ、うそを言うことができるという能力がそれに対応できるんだ。理性は未来に対応できる能力だ。じゃあ、その夢とか希望とか理想とか理念とか、志とか目的とはなんなのか。それはすべて現在よりもよりよいことなんだ。絶対こうだっちゅうようなものはない。夢も希望も、現在よりもよりよいことなんだ。だから、理性はよりよいことを考えることができる能力だと言わなければならない。だから、理性を持っておるという能力を積極的に使おうと思ったら、よりよいことを考えなければならない。よりよいことを考えなければ、理性を持ってる価値はないんだ。**

**言われたことを、言われてるままにやってるだけでは機械だ。奴隷だ。人間は言われたことに自分の判断の能力を加えて、よりよいことを考える。わが社を発展させるためには、こうしたほうがいいんじゃないでしょうか。こうしたらどうでしょうか。どんどん、どんどん、会社を発展させる提案を出していく。それが理性というものが持ってる社員の役割であり、責任だ。言われてることを、言われてるままにやるんだったら、人間じゃなくってもいい。機械でもいい、ロボットでもいい、奴隷だ。人間として、社員として、会社に関わるならば、常に未来への提言をしなければならない。それが理性という能力を持っておる人間の価値だ。理性は確かに合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。だけども、よりよいことを考えるところに理性の価値がある。よりよいことを考えなければ、理性を持ってる価値がないんだ。批判したり、否定したり、対立したり、これは理性の醜さである。理性の積極的な価値は、よりよいことを考え、よりよい状態をつくり出すところに理性の積極的なプラスの価値がある。**

**だから、われわれは、どういうふうなですね、この謙虚さを持たなければならないのか。理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力である。だから、自分がどんなに正しいと思っても、それは決して完全ではない。絶対ではない。間違ってはいないけども、間違ってはいないけども、完全ではないんだ。絶対ではないんだ。だから、自分と違う考え方の人に出会わなかったら、俺の考えは正しいと思っててもいい。だけども、自分と違った考え方の人に出会ったときが正念場だ。勝負だ。自分と違った考え方の人間に出会ったら、俺の考えは完全じゃない。そのことを思い出さなければならない。そして、自分と違う考え方の人が持ってる何かを自分は学び取って、そして、自分の考えを少しでもより高度で、より厳密で、より隙のない、よりよい考え方に発展成長させましょうというふうに理性を使うことが、人間的に正しい理性の使い方である。それが人間が理性を支配するということである。それが人間が理性を使って生きていくということである。それが人間的に正しいということなんだ。**

**理性的な正しさを追求すれば、考え方が違う人間とは絶対に一緒に仕事はできない。だけども、人間的に正しいというね、考え方をするならば、人間が理性を支配するならば、われわれは自分と違う考え方を持ってる人間と関わることによって、自分の考え方を発展成長させ、そして、より高度、より厳密な、この考え方や、判断の仕方や、仕事の仕方というものをつくっていくことができる。そういう能力をこれからわれわれは培っていかなければならない。自分と違う考え方の人間と共に仕事をして、互いに成長していく。そういうこの自分というものをですね、つくっていかなければですね、個性の時代は生きられません。同じ考え方の人間ばっかりつるんで、一緒や、一緒やって喜んでおるようじゃ、画一性の時代のやり方だ。個性の時代はそこにはない。個性を尊重しながら、違いを喜びながら、違いを生かしながら生きていかなければ、個性の時代には対応できない。相手から学んで、自分を成長させる。違うんだから、教え合える。違うんだから、学び合える。その精神がなかったならば、個性は死んでしまう。**

**われわれ、違いを嫌だなと思ったらいかん。それはもう傲慢な態度だ。違うものに対して、興味や関心や好奇心や認識意欲を持って、なんでそういう考え方ができるんだろう。どうしてそういう立場に立ったんだろう。俺は知りたい。俺は知りたい。そして、何かを相手の持ってる中の何かを学んで、考え方が違うっちゅうことは、何か自分と違うものを持ってるんですよね。なんで考え方が違ってくるんですかといったらね、相手が自分とは違う体験をしてるからだ。相手が自分とは違う経験を持ってるからだ。相手が自分とは違う勉強をしてるからだ。学習内容が違うんだ。また、相手が自分とは違うさまざまな出会いを持ってるんだ。事件と出合ったり、本と出合ったり、先生と出会ったり、出会いの違いが、考え方の違い、立場の違いをつくってしまうんだ。また相手が自分とは違う解釈をしてるんだ。相手の中に自分にはない体験、経験、学習内容、出会い、解釈がある。だから違うんだ。だから対立するんだ。だから、われわれは、対立するということをですね、この原理にしながらですね、相手から自分にないものを教えてもらおう。自分にないものを相手から学び取ろう。そして、自分の考え方をより高度で、より厳密で、より隙のない、より素晴らしい考え方に発展成長させよう。そういうこの人間としての成長意欲を持つことがですね、個性の時代においては欠くことのできない重要な生き方なんだ。人を責めるんじゃなくて、自分を成長させることに意義を用いなければならない。そうすれば、われわれは、自分と違うものを持ってる人と関わることが喜びになってくる。**

**だけど、まだほとんどの人は、そんなことはできません。だから、これからわれわれは、そのことができる人間になっていかなければならない。違うものを持ってる人間と関わることによって、自分が成長できるという力を持ったとき、離婚の激増は止まります。幼児の虐待は防げます。戦争はなくなる方向に動き始めます。違いを理由に戦うという時代から、違うんだから教え合える、学び合える。学んで互いに成長していく。それが喜びだというね、そういうこの人間性をこれからわれわれは求めていかなければなりません。とにかく、まずは理性的に謙虚になることが、これからの自分の幸せの原理である。自分が本当に幸せに生きたいと思ったならば、違い、違うということを嫌だなと思ったらいかん。違うことに関心、興味、好奇心を持って、そして、何かしら相手から学び取っていって、自分の考え方を成長させたり、自分の人間性の幅を広げていったりしてですね、自分が成長することに喜びを感じるような、そういう生き方にならんといかん。それが人間、人類の人間性をも１次元、上に進化させるというね、そういうこの生き方、やり方であります。**

**今、歴史はそれを人間に要求してるんだ。違いを理由に戦うんじゃなくって、違うんだから成長できるという人間性に進化させようと思って、今、天は、宇宙は、歴史は人に離婚の激増と幼児の虐待、そして、この違いを理由に戦う、商業戦争、こういうですね、この大きな不幸を人類に与えてる。問題というのは、すべて人間を成長させるために出てきてくれてるんだ。今、われわれの肩にのし掛かっておる問題というものを契機にして、いったい天は我に何を望んでるか。そのことを考えなければならない。離婚の激増と幼児の虐待と戦争は、人間に人間性の進化を要求してるんだ。違いを理由に戦うという、違いを理由にこの殺し合うという、そういう低級なですね、野蛮な状況から早く脱却しろよと。もっと素晴らしい生き方があるんだ。そのことを天は人間に教えるために、こういう課題を、難問を今、人間に背負わせてるんだ。問題、悩みは、自分を成長させるために出てきてくれてるんだ。問題、悩みを通して、われわれは天が何を自分に望んでるかということを考えていかなければならない。とにかく、今、われわれに一番望まれる謙虚さはですね、理性的な謙虚さであります。もっともっとわれわれは、理性的に謙虚にならないかん。**

**あとはですね、これまで何回も申し上げてきましたけど、人間には長所半分、短所半分、短所も半分ある。短所っちゅうのは、他人から嫌がられる部分だ。どんな立派な人とでも、長く付き合ったらね、必ず自分にとって嫌やなというところが半分は出てくる。誰と結婚しても、最終的には自分の嫌なところ半分、出てくるんや。それが人間なんや。それでいいんや。そうやなかったら、おかしいんやと思わないと、責め合うという構造から脱却できない。人生、責め合ったら地獄ですよ、本当にもう。もう僕なんか、60年も生きてきてですね、もう嫌っていうほど、夫婦げんかをして、もう責め合ったら地獄ということを身にしみて感じましたからね。もう人生は許し合うっきゃない。責め合えば地獄。許し合うしかない。違いを認め合って、学び合って、許すしかない。愛するとは許すことだ。愛するとは学ぶことだ。とにかくどんな人間でも、必ず相手にとって嫌なところ半分持ってるんだ。自分の中にも相手から見たら嫌なところが半分はあるんだ。だけど、相手はあんまり文句言わんと、付き合ってくれてると。なんとありがたいと思って感謝せんないかん。自分だけ文句を言うていいわけがないと。人間には短所はなくならない。偏見もなくならない。俺には偏見がある。そのことを自覚することが、謙虚さという、謙虚な心を、人間らしい心をつくっていく原理だ。短所をなくそうと思ってはならない。偏見をなくそうと思ってはならない。なくならない短所や偏見をなくそうと思うほどばかな努力はないですからね。短所がある。偏見がある。だから、われわれ、謙虚になれる。他人から学ぼうという気持ちが出てくる。**

**もう１つ、理想のない人間にわれわれは人格の高さを感じない。理想というのは、これは現実よりも高めに掲げるもんですからね。現実よりも高めに掲げる、そういうものを人間が自分の心に持ったとき、精神構造に高さが生まれてくる。われわれは、現実の中に生きておるんだ。現実の中に生きてる人間が、心の中に理想を持ったとき、意識の構造に高さができてくる。理想、目的のない人間には、人格の高さはない。理想がなかったならば、現実に流されてしまう。理想のない人間というのは、なるようにしかならないんじゃないの。適当にやっておったら、なんとかなるんじゃないの。結局、流されるしかない。流されるような生き方をしとる人間にわれわれは尊敬を感じない。ましてや、人格の高さなんか感じるわけがない。理想に燃えて生きてる人間にわれわれは、尊敬と人格の高さを感じる。そこに高貴なる精神を感じるんだ。人間には理想がなければならない。人格の高さをつくる、また大事な原理は理想を持つことだ。どれだけの大きな理想をですね、未来に掲げるか。どれだけの高い理想を未来に掲げるか。それがその人の人格の高さをつくる原理だ。**

**最後の４つ目の精神的原理ですね。最後の４つ目の精神的原理は理念への問いを持つこと。問いが大事なんだ。答えを持ったら、はい、それまでよで、そこまでで終わってしまう。問いを、答えを持って、答えに縛られた人間は、必ず他人を批判する。対立を呼んでしまう。答えに縛られたら、そこで死ぬんだ、人間は。理念への問いを持ち続けなければならない。理念への問いとはなんなのか。人格の高さをつくる理念への問いとはなんなのか。それは、人間としていかにあるべきか、いかに成すべきか、いかになるべきか。この３つの問いが人格の高さをつくる理念への問いである。人間としていかにあるべきか。そんなことを言うと、あるべきなんていうようなことを言うと、理性への原理じゃないのと、こう、思うかもしれませんよね。だけども、問いはいかなる高度な問いであっても、問いは感性から湧いてくる。答えを出すのは理性だ。人間、本当に真剣に生き始めれば、人間は本当に真剣に生き始めれば、誰でもこの場合、いかに成すべきだろう。この場合、いかにあるべきだろう、どうなるべきだろう。真剣にみんな問わざるを得なくなってくるんだ。人間というから、なんとなく抽象的になるんですけどね。経営者としていかに成すべきか。経営者としていかにあるべきか。経営者としていかになるべきか。父親として、母親として、いかにあるべきか、いかに成すべきか、いかになるべきか。政治家として、教師として、いかにあるべきか、いかに成すべきか、いかになるべきか。これは真剣に生きようとする人間にとって切実なる問いだ。この問いを問わずして、人間は誠実な自分を偽らない生き方はできない。**

**人間というと抽象的になるけど、自分が今、置かれてる立場に人間という言葉を置き換えればね、まさに切実なる、問わざるを得ない問題として、命から湧いてくる。これが問いだ。問いは命から湧いてくる。問いは感性から湧いてくる。問題を感じるのは感性だ。答えを出すのは理性だ。だけど、理性が答えを出して、理性が出した答えに人間が縛られたら一巻の終わり。そのとき、人間は人間をやめる。答えに縛られた人間は、自分と違う答えを認めようとしない。他人を批判する。他人を否定する。対立を生んでしまう。社会を破壊する。人間ではない。人間性がない。理性の奴隷だ。だけど、現実を生きるためには、答えはなければならない。だけども、答えに縛られたら、人間は秩序を破壊する存在になってしまう。だからこそ、われわれは答えを持っても、その答えに縛られてはならない。なおかつ、果たしてこれでいいんだろうか。本当に人間としていかにあるべきなんだろうか。いかに成すべきなんだろうか。いかになるべきなのか。そのことを常に問い続けなければならない。問いを持ち続けることによってのみ、人間は成長する、発展する。答えに縛られたら、そこで成長は止まってしまう。他人を批判し、否定する。醜い人間性が生まれてくる。問いを持ち続けることによって、人間は不完全なる人間としての誠実な生き方ができて、成長し続けることができる。答えも大事だけど、答えよりももっと大事なのは問いだ。問いを忘れては、人間性は消えてしまう。問いを忘れたら、理性の奴隷だ。答えに縛られたら、ちっぽけな人間。問いを持ち続けることによって、大きさのある人間になっていく。**

**そして、このいかにあるべきか、いかに成すべきか、いかになるべきか。これは自律の問いといって、自分で自分を律する。他人の思惑によって振り回されない。俺は俺だというね、自分で自分、自分の意志で自分の肉体を動かすことができる。自律、自分で自分を律する。自律の精神を持った生き方ができる。この自律の精神を持ったとき、人間には高潔なる人物という、高潔という、そういう高さが生まれてくる。他人の言葉によって振り回されることがない。確固たる信念と勇気を持った生き方ができる。多くの人間は、この問い続けることを忘れてしまった結果ね、世の中の風潮に流されて、いかにあるべきか、いかに成すべきかというこの問いを忘れて、そして、みんながやっておるんだから、まあ、ええじゃんといってですね、やってしまって、この犯罪に関わるようなことになってしまう。本当に人間が自分の肉体を自分で動かすというね、この肉体と精神が一体化した命のほんとにあり方を求めていくならば、自分の肉体が他人の思惑によって支配されてはならない。自分の肉体が他人の意志によって支配されてはならない。自分の肉体を動かすのは俺だ。自分の意志だ。他人に身を任せてならない。例え他人の命令に服する場合でも、俺もそう思うと思うからやるんだという、この自覚がなかったならば、人間ではない。そこに高潔なるですね、生き方、自分で自分を律して、他人に責任を転嫁するようなぶざまなことはしない。そういうこの生き方が生まれてくる。そこに人格の高さというものを人に感じさせる要因があるわけですね。**

**理念というのは、現実よりも高いところに掲げるものですから、理念というものを持った時、人間は真実を見失わない生き方ができる。現実に生きてる人間が、真実を見つめながら、高めに理念というものを掲げることによって、精神構造に高さというものが自然にこう、つくられてくるわけですね。とにかく、この人格の高さというものを形成する精神的原理というのは、この自信と謙虚さと理想と、それからこの理念ですね。この４つが人格の高さというものをつくるための精神的原理であります。その４つの精神的原理をですね、価値への情熱というものを、この生かすために、価値への情熱を成長させるために使う。そのことによって、人格の高さというのは成長します。ぜひもう一度ですね、その今日の話を自分の生き方なり、仕事の仕方に当てはめながらですね、もう一度、いろいろ考えてみてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**